
天使と一緒にネギま！

なおぼん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

天使と一緒にネギま！

【Nコード】

N6604Z

【作者名】

なおぼん

【あらすじ】

ごく普通のゲーオタだった少年はゲーオタだったが為に死んだ。天使との出会いを経て、少年はネギま！へとその舞台を移した。

魔法先生ネギま！の二次創作ものです。妄想爆発です。「小説」として見れない部分も多々あると思いますが、それでもよろしければどうぞ。

スターオーシャン、ワイルドアームズ要素あり。主に技。主要キャラは引っ張ってきません。警告タグは該当描写が出てきたら追加。

誤字脱字、または他作品と似た設定や描写があればご一報いただければ幸いです。

第0話 俺死んだんだとさ

俺の名前は高橋^{たかはしはじめ}一。中学3年生だ。つい今し方やり直したSO3をクリアした。ディレクターズカットの方な。やっぱこれは名作だと思う。WA一（1：F）、もな。

さて、休憩がてら何か飲みに行こうかな。そう思い部屋を出て、階段を下りようとするが。

「あ、やべ……」

突然のめまいにバランスを崩し、俺は階段から転げ落ちた――。

「う、ん……」

あれ、俺何でこんなところで寝てんだろ。

……ああ、階段から落ちたんだっけか、って体が痛くないや。仰向けに倒れたまま少し体を動かしてみたが、特に痛い個所はなかった。俺スゲーと思いつつ体を起こすが……。

「幽体離脱うつうつうつ!？」

なんと立ち上がった俺の眼下には未だ寝たままの体が転がっているのだ。ふくらはぎから下は寝たままの俺の体に重なっており見えなくなっている。……おいおい、これはなんの冗談だ？ 動揺しながら辺りを見回す。

「やほっ」

玄関口に片手を上げた少女がいた。

「……誰？」

「うん、僕天使」

天井へと視線を向ける。一度落ち着こうか。

「ちょっとー、無視しないでー」

少女がそう言うてくる。無視し続けるのも本意ではないので仕方なく視線を戻すと、既に眼前まで迫って来ていた。近い近い近い！間近で見た少女の顔は可愛かった。小顔だが若干ふつくらとしていて、たれ目気味だがくりくりした目が愛らしく、ちょこんと乗った鼻は思わずつつんしたくなる。眉上、肩上で切り揃えられた黒髪は彼女が歩きたびにふわりと靡き、見ただけでさらさらしていると分かる。俺が無視したことにご立腹なようでアヒル口を強調するかのごとく突き出している。怒っていても柔らかい雰囲気上好印象だ。というかむしろ俺の方が頭一つ分高いせいで可愛いとしか思えない……って何を冷静に分析してるんだか。話を戻そう。

「んで、その天使さんが俺に何用？ 不法侵入だぞ」

天使に不法侵入もくそもないか。言ってると思った。

「んつとねー、まず今僕たちがいるこの空間は現実世界の時間軸から外れてる。何故なら、君は悪魔に干渉され死亡してしまい、このままだと悪魔の餌になってしまうから！」

少女は手を胸の前でグツと握りしめ斜め上を向いた。とりあえずスルー。

「ざくざくいくよー。君ってゲーム大好きで怠惰が好きでめんどくさがりじゃない？　そういう今時の人って総じて悪魔受けするのが美味しく頂ける感じで」

おーい。なんじゃそりゃー。っーかこいつ、言葉の節々からなんとなくこつち方面の臭いがする。……（自称）天使のくせに。

「んでんで、君もその例に洩れず目を付けられちゃってー、でゲームクリアした達成感で魂も旨味が増えて尚美味しそうだったからめまい起こされて殺されちゃいました。ちゃんちゃん」

「ちゃんちゃん、じゃねーだろコラ」

「でー、死んじやった君の魂はまさに悪魔に喰らわれようとしていた。しかしそこに間一髪僕が間に合ったのだ！　ねー褒めて褒めてー」

俺のツツコミをナチュラルにスルーして話し続け、拳句これでもかというほど露骨に頭を差し出してくる。つくそ、ム力つくのに無駄に可愛いなこいつ。

「あー……………よしよし」

「えへへー。でね、一度天使に保護された人はもう悪魔には干渉されなくなるんだけど、君が死んじやったことは変えられない事実なんだー。だから君にはこれからこのことを決めてもらわないといけないのだ」

おー、なんか真面目な話っぱいぞ。姿勢を正そうと手を引っ込め

ようとした時のまだ撫でもらいたそうな顔のせいで緊張感はかけらもなくなつたが。

「これから、つつーと？」

「転生してまた新しい生を始めるか、別の世界に行くか、かな」

「……具体的には？」

「転生なら、前世の記憶無しで生まれ変わりだね。でもその場合天使の加護は解除されるから同じように悪魔からの襲撃が考えられるよ。君が君であることには変わらないが故に、同じような人格形成が予想されるからだね。

別の世界っていうのは、平行世界のこと。漫画でもゲームでも何でも、平行世界として扱われるよ。この世界には神と天使、悪魔がいるけど、伝説上の存在と言われているように表には出て来ないし秘匿も徹底する分表面上は平和な世界だよ。とは言ってもそれは人間社会での一般的な話でしかなくて、実際には君も経験したように見えないところで悪魔も天使も動き回ってるんだけどね。それに比べて、分かつてると思うけど平行世界には比較にならないくらい危険が有り触れてる。更に世界移動した代償として一度死んだら無に帰すことになるよ。

とは言つても、天使として君を未然に悪魔から守れなかった以上最大限強化はする。簡単に言えば損害賠償だね。まあ、君ならどっちを選ぶかは分かりきってるけどねー」

まあな。どうせ一度死んじまつたんなら、あとはやりたいことやるさ。

「ネギま！の世界に行きたい」

「ネギま！だねー。大丈夫だよー。修正力、イレギュラーの有無はどうするー？」

「両方無しで」

「分かったー。持たいスキル・アイテムは？」

「SO3・WAのものを持って行きたい。ディレクターズカット、：
F含めてな」

「ふんふん、じゃあパラメータをSO3式、術技は両方、装備品・
アイテムは任意で設定つてことにしとくねー。あとカンストはない
から自由に鍛えてもらって構わないよ。不老はデフォだよ」

「分かった」

「じゃあ、もうないかな？ ないなら送っちゃうよー」

「ちよつと待った。俺が世界移動したとして、この世界での俺はど
うなる？」

さすがに今までの15年間を簡単に忘れられるほど冷めてない。

「うん、ちゃんとそういうことと言える人は好感が持てるよ。」

世界を移動するということはこの世界から君という存在が消える
ということ。つまり、地球上の全てのものから君という存在が消え
ることになる。君がネギま！の世界に移動したら、この肉体も処理
させてもらうことになる」

「そう、か……」

予想の一つではあったが、やはり堪えるものがあるな……。

とはいえ、俺はもう死んじまった身だ。悲しまない人がいないだ
け幸せなのかもしれない。

「もう他にはないかな？」

「いや、あと二つだけ。……君の名前は？」

すごい恥ずかしいし緊張するが、一つだけ聞いておきたいこと
がある。

「僕ー？　僕はねーニアっていうんだー」

にへらつと笑うニア。

後で後悔するかもしれないが今じゃないなら良いだろ？

「……じゃあさ、ニア。ニアと仮契約って出来るのか？」

「……えっ？」

表情が固まるニア。うわあああもう後悔した！　言った瞬間後悔した！！　5秒前の俺は死ねっ！！！！

死んでるわ、俺。っーか言った瞬間後悔するって気付けよ！

「な、なんでもないよ！？　じゃあもう送ってもらって良いよ！？　むしろ早く送ってください！！」

早くこの場から消え去りたい。やばい。もう何を言っているのかも分からない。

「……えへへ、そんなこと言われたの初めてだよ。

じゃあまた後でね、ハジメちゃん」

「え？」

ニアの言葉を理解できないまま辺りが光に包まれる。真っ白の空間で俺が最後に見、感じたものは、目を閉じたニアの少し赤い顔のドアップと、柔らかい何かだった。

第1話 ネギまの世界に着いたみたいだ

光が収まると、見たことのない部屋にいた。どこだ、ここ？ てゆーか、俺さつき……。駄目だ、思い出したらめっちゃ恥ずかしくなってきた。でも、あんな美少女とキスしちゃったんだよな。……ニア、可愛かったなあ……。

「呼んだー？」

「うおわあっ！！？」

突然後ろから聞こえた声に思わず情けない声が出る。咄嗟に振り向いたそこには――。

「……ニア？」

「そだよーハジメちゃん。さっきぶりー！」

満面の笑みを浮かべ、片手を上げながら元気よく挨拶してくる。
え？

「え？ なんでいんの？」

「ハジメちゃんが呼んだからだよー」

「いや呼んでねーけど」

「あれれー？ おかしいなー。ハジメちゃんが名前呼んでくれなきゃ出てこれないはずなんだけど」

「……何の話だ？ ここはどこだ？ もうネギま！の世界なのか？」

いきなり知らない場所に飛ばされた挙げ句驚かされて混乱中。説明を求む。

「それがハジメちゃんのメニュー画面だよ。見て分かる通り今のパ
ーティーはハジメちゃんと僕。これから仲間が増えればそこに随時
更新されるよ。まあ仲間といっても曖昧な定義ではあるけどね。仲
良くなつてよく一緒に行動するようになったら載ると思えば良いん
じゃないかな。」

ちなみにステータス画面とは言っても個人情報とかは載らないよ。
あくまでも簡単なメニュー画面でしかないからね」

……スリーサイズなんて期待してないよ、ホントダヨ。

「そんでね、そこで出来るのは装備変更とアイテムの具現化、アイ
テムクリエーション、あとは術技の確認かな。術技に関してはON
/OFFの設定も出来るよ。修業くらいしか使い道はないと思うけ
ど」

へえー、なんか感心すると共にwktkだ。……ん？ アイテム
がシリーズ通して揃ってやがる！ しかも∞だし。

「あ、気付いた？ 2作だけじゃつまらなかったからシリーズで揃
えたよ。それに伴ってハジメちゃんもそれらの術技を使えるように
なってる。まあちよつとしたお遊びって感じ。」

ちなみにそこにはこの世界の物も入れられるから、基本手ぶら
でオツケーだよ。秘匿するためのカモフラージュは必須だけどね。
リュックとかさ。

装備画面・アイテム画面のショートカット設定っていうのは念じ
れば設定場所に具現化されるって機能だけど、各部位1つずつ、手
持ち袋にはその袋の容量までって制限があるからね」

それでもショートカットできるのはでかい。流石に戦闘中にメニ
ューは開いてられないからな。

「肝心の戦闘スキルだけど、セーブデータがそのまま経験値になるよ。簡単に言えばセーブデータにいたパーティーメンバー全員の経験を継承できるの。もちろんキャラが育ってなかったり未消化のイベントがあれば反映されないよ」

結構すごいことなんじゃないのかそれ？ うおっ、頭ん中何か入ってきた！！

……すげえ、忘れていたことを思い出した感じだ。つーかこれ負けないよな、マジで。

「説明はざっとこんなところかな。何か聞きたいこととかある？」

聞きたいこと、ねえ……あ、そういえば。

「ニアってさ、俺に名前呼ばれなきゃここにいなかったわけだよな？　なんでそんな回りくどい条件にしたんだ？　下手したらいつまでも出てこれなかったんだぜ？」

そう、ニアがこっちに出てくるための条件。それが気になったのだ。普通に考えれば一緒に来りゃいいじゃんという話で。

「ふっふっふ、良くぞ聞いてくれました！！　何故その条件にしたか。順を追って説明していくよ」

え、そんな複雑な話？

「まず、僕とハジメちゃんはキスをした」

う、恥ずかしいこと思い出せんよ。

「しかしハジメちゃんはその瞬間に世界移動してしまった」

そうそう、思考が止まったままだった。

「そして次の瞬間ハジメちゃんはこの場所にいて、当然困惑する」

そうだな、どこなのかすら分からないからな。

「そして少しずつ冷静になり、今までの流れを反芻する」

うん、その通りだ。

「自室にいたところから始まって、よく分からないけど死んじやつたってことなんかを頭に浮かべつつ、最終的に僕とのキスに行き着く」

うん……ん？ 二度目だぞそれ。

「僕の唇の感触を思い出し、唇を指で触りながら、トリップ気味の思考で『二a「言わせねえよ!!」?」」

——スパーン!!

本日二度目のハリセン。どうしてこうなった。

「うっ、痛いよハジメちゃん」

頭をさすりながら半泣き上目遣いのニアさん。……畜生、可愛いじ

やねえか！

「まあ、条件についてはそういうこと」

「悪趣味だなおい！！」

「あ、大事なことを忘れてた。ここは麻帆良学園の敷地内で、ハジメちゃんは僕と一軒家に2人暮らしだからね。いつでもやれるよ！」

「……………。はあああああああ！！？ いやお前意味わかんないから！！ 何で2人暮らし！？」

「ほらーあれだよ幼馴染ってやつー！」

——ピンポン——

そんな微妙に噛み合わない会話をしていたその時、どこからかチャイムの音が響いてきた。誰か来たのかなと思っただが、何分この家の間取りを知らないので対応できるわけもなく。ニアに顔を向けると俺ににこつと微笑んでから部屋を出て行った。見送りそうになったところで我に振り返を付いていく。はーいと言いながらニアが玄関が開けると外にはギターケースを担いだ褐色肌の女性が立っていた。わお、龍宮真名さんじゃないっすか……。背えたけー。胸でけー！！

「やあ2人共。なにやら大声が聞こえてきたが何かあったのかい？」

「うっんー、何にもないよー」

「そうかい？ ならいいんだけどね」

先程の俺の声は外まで響いていたらしい。恥ずかしい……。

「さて、もう時間も押してるしそろそろ行こうか。世界樹広場は少し遠いから今から出ないと間に合わない。刹那も門の所で待ってる」
「そうだねー。さあハジメちゃん、行くよー！」

「お、おお……」

何か分からないがこれから世界樹広場に集合らしい。俺、流れについていけないんですが。

しっかりと玄関を施錠してから家から出る。家は外れの方に建っているようで周りに建物は見受けられない。ふと振り返ると2階建ての結構しっかりした木造建築物が聳え立っていた。……え、家であくね！？ 2人暮らしだよね！？

驚愕する俺を置いて2人はさっさと歩いてしまっていたので、若干の虚しさを振り払うように走って追いつく。庭も車5台くらいは停められるな。……いらん基準だな。

「お待たせ、刹那」

「いや、大丈夫だ。じゃあ行こうか」

門の横で壁に背をもたれて待っていた竹刀袋を担いだ少女、桜咲刹那と合流し、世界樹広場へと歩き出す。刹那たん可愛いよはあはあ——。

「……………何この状況」

「いや、何か背後に不穏な気配がしたものでつい……。すまない」「左に同じ」

邪な考えが頭をよぎった瞬間、前を歩く刹那と真名に得物を突き付けられた。超こえー！！

『……………変態』

頭の中にニアの声が響いた。なるほど、これが念話か。…………何で

バレたし。

『言い忘れてた。今日の日付なんだけど、2002年9月1日、僕は中学2年生だよ。僕はつい最近ここに来た転校生で、これから魔法関係の顔合わせだよ。真名と刹那には来園時に案内をしてもらって、今も面倒見てもらってる感じ。ハジメちゃんも既に2人は下の名前で呼び合う程度は仲良くなってるよ。』

今学園のMAP情報を送ったから、道に迷うことはないと思う。見てもらえば分かると思うんだけど、形式はSO3のMAPで、さらに特典でパーティーメンバーは色付きの点で表示されるよ』
『そうか、助かる。でもそういうことは事後報告よくない』

別に貶してるつもりはないんだが、こいつ追加情報多くないか？
ちなみに念話のやり方はさっきのダウンロードと一緒に頭に入ってた。

「これから一とニアの裏の顔合わせか。恐らく手合せみたいなことをするだろうから楽しみだよ。身のこなしからして、2人の実力には興味があるからね」

「私もだ。出来れば実際に手合わせしてみたい」
「そうなればおもしろそうだねー！」

逸る気持ちを抑えられないといった風の2人。そんな食いつくほどのもんなのかしら。そんな考えが頭をよぎるがニアと一緒に笑い合っているところを見て、単純に仲良くなったからだと納得する。
例えるなら「なあなあ、お前どんくらい強いのか」とかそんな感じだ。

「しかしなあ、女の子相手って戦いづらいんだが」
「それは男女差別だ。今時流行らないよ」

「そうだぞ、私にも真名にも矜持があるんだ」

経験としての戦闘は確かに体に浸透しているが、俺自身が行った訳じゃないから抵抗がある。そう思ってた口に出してしまったが、それは侮辱でしかないんだよな。

「そうだな、すまん」

「ハジメさんはフェミニンなんだよー」

「その略し方は語弊があるだろ……」

4人で話しながら広場へと向かう。自然に会話できてることに我ながらちよつと驚き。漫画読んで人となりはある程度分かっているからだろう。しかし手合せか……。さっき見たステータスは確かにLV255だったし、こつから更に上がるらしいし、正直装備無しでも勝てる気がしてならん。あ、でも装備外すと防御が低すぎるか。歩きながら装備画面と睨めっこ。とりあえず相手によって装備を変えればいいかな。

そうこうしている内に広場へと着いた。既に大勢集まっている。俺達で最後だったかな？

「ふおおおお、噂をすれば何とやらじゃな。これで全員揃ったようじゃし、早速始めるとするか。」

「くん、ニアくん、ここに」

「「はい」」

広場の中心、一番高い所に立つ学園長に名を呼ばれ、俺とニアは同時に足を踏み出した。

第2話 顔合わせからの模擬戦だつてよ

学園長に呼ばれ広場の中心へと向かう。魔法先生、魔法生徒達からの様々な視線に耐えつつ、学園長の所まで歩いていく。近づいていくにつれ大きくなる学園長の姿。……とりあえず、頭のことは触れないようにしよう。直に見るのは目に悪い。というか指差して叫んでしまう。高畑先生は学園長の後ろに控えていた。階段を上り切り2人の近くまで行くと皆と向き合うよう指示された。あー、緊張する。人前に立つのは苦手だ。

「さて、今日皆に集まってもらったのは他でもないこの2人の紹介の為じゃ。男の子が高橋一くん、女の子がニア・レストくんじゃ。

2人共良い子じゃから、皆良くしてやってくれ」

「高橋一です。よろしくお願いします」

「ニア・レストです。よろしくお願いします」

うわ、声ガチガチ。震えそうになるんだけど。ちらりとニアを見ると正しく天使の微笑みを浮かべていた。流石天使、こんなことでは動じないか。……にしてもそれ、ニコポ狙ってんの？

「うむ、挨拶はこのくらいにしてこれから2人の实力を見てもらうと思う。誰か手合わせしたい者はおるかの？」

「では私と刹那が」

真名が名乗りを挙げる。ちょ、おまつ、立候補すんじゃないよ！……なんか他にもうずうずしてる人がいるんだけど――（斜め後ろの髭メガネとか）、どうなるんだろ？

「ふむ、真名くんと刹那くんか。良かるう。やってみると良い」

「「ありがとうございます」」

「では、4人は下に降りとくれ」

何の異論もなく対戦相手が決定。広場の中腹へと足を進める。つかホントにこいつらとやるのかよ。やっぱ抵抗あるなあ。

「ハジメちゃんは前衛ね。好き勝手やって良いけど、本気でやっちゃダメだよ？」

「りょーかい」

「一、本気で行くからそのつもりで頼む」
「マジっすか」

刹那の本気ってどんなやねん。にしても、戦闘スタイルはどうしよう。……よし、フェイト・ラインゴッドでいくか。武器はプロテクトかけたインフェリアソードで良いかな。防具は痛い嫌だからヴァリアントメールでいこう。

ちなみに、防具に関しては装備しても具現化されない。何故か？ゲーム会社に言ってくれ。つかバーニイシューズとか具現化されても困るわ。

「4人共準備は良いかの？
では、始め！」

始めの合図と同時に真名からの先制弾が飛んで来るが、それを剣で弾く。おお、マジで体が動く。弾が見える。

……チートだよな、初戦でこんな冷静に状況を把握できるんだから。つか真名、どんな弾か知らんがいきなりヘッドショットとはどういう了見だ？ そう思っていながらも体は動いていた。だからこそ体勢を低くしつつ突っ込んできたものの、弾を弾くという予想外の動きに一瞬意識が乱れた刹那に向けて右手で刺突を放てるわけだ。

刹那は一瞬反応が遅れたものの落ち着いた動きで太刀を動かし、刺突の軌道を外側に逸らしつつ踏み込んでくる。懷に攻め込まれつつ刺突が迫っている俺に躲す以外の手段はなく、空いた左手で太刀の腹を押しつつ斜め後方へ飛ぶ。下がった俺に対し刹那はさらに勢いの乗った切り上げを繰り返してくるが、俺もそれには剣で弾く余裕があった。よしここから反撃だと踏み込もうとしたものの、事もあるうに刹那はニヤリと笑って斜めに方向転換、ニアへと突っ込んでいく。おおおい、本気でやるってそういうこと！？

刹那を抑えようと慌てて振り向き、後を追わんとした瞬間に嫌な予感。前に出していた右足を無理矢理蹴り上げ、左足で地面を蹴り体を強引に後ろへ飛ばす。コンマの差で踏もうとしていた地面に銃弾が埋まり、頭のあった所も通過していった。着地しつつ振り向くと真名がライフルのスコープを覗きながら口角を吊り上げていた。ちっ、連携が上手いな。

『ハジメちゃんは真名をお願いします！』

聞こえてきた念話にその場から飛び退くことで追撃弾を避けつつニアへ顔を向けると、まさに刹那がニアに向け刀を振り下ろすところだった。振り下ろされた刀に合わせて、ニアが半身になりながら左手を振り上げる。服の上から腰に巻いた3つのベルトから、両手首の腕輪に緩く垂れながら繋がり、腕輪から下に垂れ下がっていたケーブルがその動きに釣られて刀へと向かっていく。ケーブルは刀に触れても切れずにそのままぐるりと絡まり、直後ケーブルから光弾が全方位に発射される。流石の刹那もケーブルが切れず、かつ光弾が発射されるなど予想できなかったのだろう、被弾し仰け反るも大して効いていないのか後方へ大きく距離を取る。心配はいらなそうだがニア、お前それエンジェリックケーブルじゃねーか。最強武器だろ自重しろよ！

……さて、俺もそろそろ真名とデートと洒落込みますかね。

俺が振り向くと同時に真名は足元に置いてあったギターケースを蹴り、中から飛び出してきた二丁拳銃をライフルから持ち替える。ライフルのスコープから目を離していたことからどうやら彼女もニアの防御光弾に呆けていたらしい。真名が俺の腹目掛けて弾を撃つのと、俺が斜め前へと走り出すのは同時だった。弾が外れても次をきっちり繋げてくる卓越したスキルは流石だ。トリッキーな動きで照準を外させようとする俺をきっちり捉え、かつ先読みしながら撃ってくる。だが俺もその銃弾を避け、あるいは弾きながら距離を詰める。

この手合わせに限っては真名は非常に不利だと言っている。何せこの広場から出られない上に最初から姿を露見してしまっている。故にスナイパーとしてではなくガンナーとして対峙している訳だが、目に見える範囲からなら回避も容易い。なんたつて今の俺はフェイトだ。レーザーガンとか避けまくってるんだから拳銃には負けない。……と思う。

にしてもなーんか視線を感じる。数は3つ。2つは……木の上か。もう1つはよく分かんないけどかなり距離がある気がする。

「ぐああああああつ！！」

「……………」

刹那の悲鳴に2人して一瞬そちらを見遣る。……うん、見なかったことにしよう。

縦横無尽に駆け回り、牽制を混じえつつ連射される銃弾の嵐を掻い潜り、距離を広げようと動く真名に徐々に接近していく。そして遂に真名を射程圏内に捉える。胸部を狙った右の銃弾をダッキングすることで躲す。さすがにこの距離で下への回避はないと踏んだのであるう左手は俺を捉えてはいない。絶好の好機！！

「はっ、たあっ、はああっ!!」

掛け声と共にブレード・リアクター発動。1 撃目斬り上げ、予想以上の剣速に若干の動揺が見られるも半身になって回避される。2 撃目カウンターを狙ってきた銃弾を切り裂きながらの振り下ろし、先程よりも余裕はなくなったが半歩下がることで回避される。3 撃目渾身の刺突!!

「ぐっ!？」

バックステップで安全に回避し、事後硬直を狙おうとしたようだが甘い。剣先から飛び出した衝撃波をもろに食らい、宙に浮いていた真名は大きくバランスを崩した。

体勢を立て直す時間は与えない。瞬時に距離を詰め、無理な体勢からでも正確に腹部を狙う銃弾を剣で弾き、脚を狙った銃弾は左の手甲で殴りながら懐へ潜り込むと同時に剣を真名の顔すれすれに投擲、剣に視線と意識が流れた真名の右手の銃を下から殴り飛ばし、左手首を掴み背後に回りながら捻り上げ銃を落とさせ押し倒す。下がアスファルトだし、何より女の子相手にやりたくはないが、押し倒しながら上半身を真名の背中に乗せ伸ばした足で右手を踏んだ。ついでに腰に差した短剣を抜き首筋に添える。

「どうする？」

「……降参だよ。」

「だけどー、こんな人前で私を辱めるなんてとんだ変態だね」

「どうしてそうなる!？」

蠱惑的な笑みを浮かべる真名から咄嗟に距離を取る。狼狽しつつ回りを見ると俺の動きから察したのかニヤニヤしていたり、先ほどの光景から顔を赤くしていたり憐れんでいたりと様々だ。真名を組

み伏せた後、体勢的に耳元で喋るしかなかったから遠目かなり危険かもしれないが……。知らず知らず頭を抱えていた。

「さて、とにかくこれで手合せ終了だね」

声のした方に顔を向けると、いつの間にか立ち上がった真名が俺に向かって微笑んでいた。

ふふん、驚いてる驚いてる。ただのファッションだとも思っただけかな？ これ一応殴ったら岩を軽く砕くくらいの性能持つてるんだけどなー。まあいっか。距離も離れたし今度はこっちから攻めるぞー！ 今の僕はスフレ・ロセッティ、「幻惑の妖精」なんだから！

「えーい！」

「なっ！？」

超高速でルアーを伸ばし敵に引っ掛け巻き取ることで、敵を引き寄せたり自ら引っ張られて相手に特攻したりするバトルスキル、「ビヨンド・ルアー」。一瞬で伸びたルアーは硬直している刹那をしっかりと搦め捕った。初見ではまず避けられないと思うし、実際刹那も動けない。引っ張られてきた刹那に対しスキルキャンセルでパパパ・スプラッシュを発動させる。

「ぐあああああああっ！！」

その場でくるくる回りケープを振り回し、その先端に付いている天使と悪魔の人形一（とにかく硬い）による物理攻撃と、技の発動と同時に発生し、発動者を中心に渦巻き状に回転していく大小様々な無数の黄色い星型衝撃波での攻撃が多段ヒット。宙へ弾き飛ばされる刹那。さらにここでダメ押しのドキューン・ブラスト！

「がはつつつ——」

右手で形作った銃の照準を刹那に合わせ、その指先から発射された無色弾が刹那に被弾。その衝撃でさらに上空へと宙を舞った刹那は放物線を描きつつ落下、受け身を取ることなく地面に叩き付けられた。

「……………うーん、やりすぎちゃったかなあ。でも一応威力は抑えたし大丈夫だよね！……………とりあえず刹那を回収しよう」と。

真名の笑みに一瞬呆けてしまったが、すぐに俺の後ろに焦点がいつていることに気づく。視線を追って振り向くと刹那とニアが歩いて来ていた。……………刹那がなんかボロボロだ。表情も悲壮感漂ってる。ニアが治したのかケガはないみたいだな。まったく、俺に言う前にお前が自重しろよ。当のニアは……………怒ってる？ 何故。

「ハジメちゃん」

「……………はい」

「何してたの？」

「何って真名と手合わせして「興奮して押し倒しました」ちょおお

お!？」

このタイミングで真名さん何言ってくれやがるんですか!？ もうちよつと考えようよ!!

「ハジメちゃん!! エツチならまずボクとしなきゃダメ!!」

「はあ!!? お前何言つて——」

「一。私が負けたことは事実だ。この体、一の好きにするといい」「ちよつ!!?」

「ままま真名!？ なな何を言ってるんだ!!?」

「冗談だよ」

釈明すら許されない俺に意味不明なことを口走りつつ詰め寄るニア、あわあわとテンパってる刹那にあくどい笑みを浮かべる真名。畜生、さっきの微笑みはこれを狙ってたのか!!!!

「ウオッホン!! お楽しみ中の所悪いが締めさせてもらっても良いかの?」

「っ!!? はっ、はいっ!!」

やっべえ……、周りが見えてなかったよ……。もう今すぐお家帰りたい。視線が痛い!! ニアも真名もよくあんなこと言つて普通でいられるよな……。もはやこえー。

俺と刹那は顔を真つ赤にして俯いており、ニアはそんな俺の腕に絡み付き、真名は普段通り立っている。畜生、離れてほしいのにはしくない!!

「……………。さて、先の手合わせで分かる通り、2人共かなりの手練れじゃ。見慣れぬ戦法に驚いた者もいるかもしれんが、それは隠れ里で育ったが故の特有の技法じゃとしか言えん。隠れ里と聞いて

警戒するかもしれないが、この子達の身柄及び信頼性はワシが保証するものであり、よってそれらの件で余計なちよっかいをかけることは禁止とする。よいな？

2人には明日から警備のシフトに入ってもらうことになる。皆も2人に負けんよう日々精進を重ねい。以上、解散！」

学園長ですら憐みから場を流す程の裏の顔合わせが終わった。予想を遥かに突き抜ける疲労度だった。主に真名のせいだ。

ありや、木の上で見てた2人は帰ったみたいだ。もう1つの気配も消えたな。まあ気にしても仕方ないか。

「それにしても、ニアの戦い方には驚かされたよ。見たことのないものばかりだった」

「んー、学園長も言ってたけど特殊なものなんだー。あとは秘密ー！」

「一もかい？ 刹那の神鳴流に似たものや暗器のようなものもあったが」

「そうだな、まだ秘密だ」

結局何も分からない返答。神鳴流という単語に大層興味をそそられたらしい刹那ははぐらかされて不満そうだったが、それ以上何も言わなかった。真名はまだと言った意味を理解したのだろう、気長に待つと言ってくれた。うゝゝゝゝ。ニアと真名はともかく、なんで刹那ももう普通に会話できるんだよ。俺が気にし過ぎなの？

そっからは4人でだらだら歩いて、家の前。

「ふう、やっと着いた。じゃあ刹那、真名、また明日な」

「おやすみー！」

「ああ、おやすみ」

「おやすみ。……そうだー、ちょっといいか？」
「ん？」

真名に手招きされ近付く。耳元に顔を寄せられドキツとする。

「さっき言ったこと、1分^ぶくらいは本気だよ」

「んん？ ……………はあっ！？」

「ふふっ、じゃあね」

言いたいだけ言って真名は歩いて行つた。刹那も首を傾げながらも真名を追う。

「ねー、真名なんてー？」

「いや、何でもないよ。あー疲れたー」

「えー、何それー！」

さっきのつて、やっぱアレだよな？ ったくあいつ、最後の最後まで掻き回していきやがって……。まあからかつてるだけだと思うけど。つーか一分つてなんだよ。1%じゃん！ もはや0じゃん！

「なあ真名、一になんて？」

「ああ、押し倒された仕返しをしておいた」

「はあ……？」

訳が分からないといった顔をする刹那。正直、自分でもなぜあんなことを口走ったかよく分からないんだけどね。人をからかうのは好きだが、自分をネタにすることはまずない。ましてやあんな直接的な表現など……。

私が圧倒されるなんて何時振りだろう。本気ではないし様子見ではあったが全力でやった。にも拘らず初撃を弾かれ、不意打ちを躲され、あまつさえ一度も被弾させられなかった。

私に向かって来る時の真剣な表情、接近時の私へのダメージを考慮した絶妙な力加減。……ふっ、らしくないな。全て君のせいだぞ、一。

第3話 学校生活が始まる

顔合わせの翌日。夜中にニアと何かあったとかそんなこともなく、朝を迎えた。俺は男子中等部に所属ということなので、ニアとは自宅の門で別れた。家からだとお互いの中等部は反対方向だからな。

そしてやってきました男子中等部。クラスは2 - Fか。正直男子ばっかつて華がなくて嫌いだ。仕方ないけどな。まあ適当に過ごそう。

隣の席が上村、後ろの席が荻原だということ覚えていた以外特に何事もなく時間は過ぎ去り、放課後になった。前述の2人に部活の勧誘をされたが今は入る気はないと断っておいた。やることもないので帰宅しようと校外に出た俺に念話が届いた。

『あ、ハジメちゃん？ 僕だけど今大丈夫？』

『ああ、どうした？』

『うん、僕が2 - Aだつてことは話したよね？ 実は席がエヴァちゃんの隣なんだけど、ちよつと顔貸せって言われちゃって。今エヴァちゃんと茶々丸ちゃんと一緒にエヴァちゃん家に向かつてるんだけど、僕がハジメちゃんの従者だつて話したらエヴァちゃんがハジメちゃんも呼べつて。MAPで僕的位置は分かると思うから、合流できないかな？』

『分かった、なるべく早く行く』

『うん、じゃあよろしくね』

ふむ、まあ何らかのアクションはしてくるだろうと思ったが、昨日の今日とはな。まあこちらとしては早くても問題はないんだが。さて、相手はかのエヴァンジェリンだし、ご機嫌を損ねるのは避け

たい。急いで行くでしょう。

MAPを逐一確認しつつ走り続けること数十分。森の中を歩いているニア達を発見した。

「あ、ハジメちゃん」

「おう。」

どうも初めまして、高橋一と申します」

「エヴァンジェリン・A・K・マクダウェルだ」

「絡繰茶々丸と申します。以後お見知りおきを」

ニアの声に歩みを止めた2人と初めての挨拶を交わす。エヴァちつちえー。

「おい、何か失礼なことを考えてないか？」

「いえ、滅相もございません」

エヴァこえー！ でも事実を再確認してただけだから仕方ないよな！

「……まあいい。」

さて高橋一、今日こうして呼んだのは他でもない、お前達に話したいことがあるからだ。それも誰の干渉も受けない所だな。そのために今私の家へ向かっている。拒否権はない、そのまま付いてこい」

おーおー、清々しいまでの傍若無人さだな。まあいいけど。エヴァンジェリンと茶々丸の先導のもとしばらく歩くこと数分、森の中のログハウスまで辿り着いた。

「ここだ、入れ」

ログハウスに入り、そのままリビングに通される。茶々丸は茶の用意だろう。キッチンへと消えて行った。

「……それで、どういった用件で俺達は呼ばれたんだ？」

向かいにどっかりと座るエヴァンジェリンへと問いかける。時間をかける必要もないので単刀直入に。ニアは話し合いは俺に任せられしくぽけーっとしている。視線はキッチンへと向かっているのでお菓子待ちだろうか？ 何にせよ緊張感のない奴だ。

「貴様等は私の正体を知っているか？」

「闇の福音。不死の魔法使い。童姿の闇の魔王――。幼女。ツンデレ。etc...」

「そうだ。そこまで分かっているでよく逃げなかったな」

「っ悪いことしたわけじゃないし。それに襲撃目的じゃなさそうだからな」

わざわざ家に招くんだ、何か話があるだけだろうと踏んでいた。失礼なこと考えて一瞬話についていけなかったなんてことはないぞ。

「まあ、な。」

ところで貴様等、昨日私に気付いていたな？」

「というと？」

「とばけるな。裏の顔合わせの時だ」

昨日の視線のうちの2つ、木の上で観戦していたのはエヴァンジ

エリンと茶々丸だ。ニアも気づいてたか。

「いや、普通にこっち見てたじゃん」

「真名、刹那と手合わせしながら私を視認できれば十分だ。あいつ等の實力は私も認めている。それを余裕を持って相手出来るんだ、貴様等も相当の實力者ということだ」

事実ではあるけど、それがどうしたって言うんだ？

「私にかけられている忌ま忌ましい呪い、『登校地獄』の解除を頼みたい」

俺の顔に浮かんだ疑問を読み取ったのか、そう切り出してきた。なるほどね、それが目的か。

「あつ、お菓子きたーっ！」

ちよつ、ニアさん空気読んで！ 今シリアスだから！ 話の腰折らないで！ エヴァさん青筋立つてるよ！？ 殺気漏れてるよ！？

「つつ、続きを頼む」

何とか話を元に戻すべくこちらから話題を振る。その間も茶々丸はテーブルに紅茶と茶菓子を置いていき、ニアはそれが置かれるや否や食べ始めたが。大人しくしてろよこのやろう！！

「……………この呪いのせいで、私はこの学園から出られず、呪いが続く限り登校の義務が課せられている。今年で14年目、いい加減我慢の限界だった所にお前達がやって来た。昨晚の手合わせでの實力を見込んでの頼みというわけだ」

相変わらず青筋が立ったままだが、俺がちゃんと話をしているからか返答は返ってきた。殺気は漏れたままだ。

「このお菓子おいしー！ 茶々丸ちゃんが作ったの？」

「はい、今日いらっしやることは分かっておりますので」

確実にこのフリーダムが原因だと思うけどな！！

「……悪の魔法使いなら、実力行使で命令って選択肢もあるんじゃないか？」

「……今の私は登校地獄と学園結界のおかげで普通の10才児と変わらん身体能力だ。そんな状態で未だ実力の全貌を見せない貴様等と死合うつもりはない。それに、貴様等はあのいけ好かない正義の魔法使いとは違うようだからな」

俺とエヴァはニアを放置する方向で話を続ける。ストレス溜まるだけだし。

正直な話今のエヴァなら俺1人でも倒せるだろうな。茶々丸もいるがこちらにもニアがいるし。まあ殺り合うつもりはないけど。

「それを解除することで発生する俺達のメリット、デメリットは？」
「呪いを解除してくれるならば貴様等は私の恩人だ。私に出来ることなら何でもしよう。最強の魔法使いたる私に貸しを作れるのだ。安いものだろう？ それに、この呪いも本来なら11年前に解かれるはずだったものだ。とつくに時効を迎えている。誰にも文句など言わせん」

……随分と下手に出るな。態度と口調自体は尊大だが、ここまで好条件を出して来るのか。それだけこの機会をものにしたいというこ

とか。まあエヴァンジェリンの言うことは正論なんだが、他の魔法使い達にしてみれば大問題なんだよな。元賞金首、悪の魔法使いの再臨な訳だし。争いの火種を産むことだけは避けたい、とすれば――

「エヴァンジェリン、お前が俺の配下につくなら考えても良い」
「……………なんだと？」

室温が一気に下がった気がした。ニアに苛々して飛ばしていたのなんて目じゃないくらい濃厚な殺気がリビングに満ちる。能力制限されてこれかと若干の怖れも抱くが、ビビっても話が進まないの
で平静を装い切り出す。

「登校地獄を呪いとするなら言わば状態異常だ。そういう認識でいけば恐らく解除は可能だと思う。でも、ただ呪いを解除しただけでは正義の魔法使いが五月蠅いのは明らかだ。エヴァにも、もちろん俺達にも突っ掛かって来るだろう。俺はそれを避けたい。その為にエヴァに一芝居打ってもらいたいんだ。あくまで表面的な上下関係で、実質的に下につけて言ってるわけじゃないんだ」

と弁明しておくが、どうやら理解はしてくれたようだ。殺気が多少収まった。多少。

「言い分は分かった。理解もできる。だが、例え仮初めでも私を配下に置く事実が変わらん。私が他人の下につくことなど有り得ん！却下だ――！」

うーむ、困ったなあ。正義に目をつけられるのは嫌なんだけど…。

「その呪い、解きたいんじゃないの？」

「……何？」

今まで一切口を挟まなかったニアが突然割り込んできた。ニアを横目で盗み見ると真剣な表情のニアの横顔が見えた。エヴァをしつかりと見据えつつ、ニアが再び口を開く。

「エヴァちゃんが自分の在り方に誇りを持っていることは分かっているよ。長い年月そうやって生きてきて、それが譲れないものだってことも。でも、こっちは今現在悪の魔法使いをやってるわけじゃないし、エヴァちゃんの呪いを解くことで僕達に降りかかるリスクはその程度のメリットでは相殺すらできない。

恥はかくけど、自分の望んだ結果が得られる。ただ解除するよりも面倒な事態に陥らない。事態が収まれば関係も絶てる。ハジメちゃんが提示したのは、そういうことが出来る手段だよ。ただ呪いを解除することとは比べるまでもないだと思っただけど。

まあ、力で押さえ付けるも何もパワーバランス自体僕達の方に傾いてると思うけどね」

ちよつとおおお何最後に煽っちゃってんの！？ てゆうか全体的に挑発的なんですけどー！！

あ、殺気が今日一番の濃さになりました。

「面白い。私達よりも貴様等の方が強いと？……良いだろう、ついで来い」

……死闘フラグが立ちました。バトルフェイズに移行します。……どうしてこうなった。

第4話 ガチバトルに発展してしまった

所変わってエヴァンジェリン宅地下室に安置されたダイオラマ球内の浜辺に俺はいる。隣にはニア、相対するはエヴァンジェリン、その後方にチャチャゼロ、茶々丸が控えている。どうやら数合わせとかそういうの考えてないっぽい。完全に殺しに来てないか、これ？

「ニアさん、何してくれちゃってんすか」

「ハジメちゃん、これは避けられない戦いなんだよ。口で言ってもエヴァちゃんが下につくことはないのは分かってたはずだよ。仮に下についた所で結局吸血鬼は存在自体が悪だとか、貴様が彼を洗脳したんだろとか、いちゃもんつけてくる人がいるってことをきくとエヴァちゃんは理解してる。だからこそ自分が命令した方が早いらしく腐れないし簡単だって思ってる。」

実際にはそうした所で僕達に追及が来ない訳無いんだけど、多分それすらも自分の手で処理するんだと思う。『誇りある悪』として僕達の方まで罪を負って、ね。

でも、ハジメちゃんはそれが嫌なんですよ？ エヴァちゃんが本当の意味で光に生きればって、少しでもその手助けが出来たらって考えたんでしょ？

おこがましいとも思うけど、僕はそれくらいの方が好みだし、確かにハジメちゃんにはそれが出来るだけの力があるから。だから、今は闘って、勝って、実行しようよ」

……まさかそこまで考えてるなんてな。普段のおちゃらけた姿からは想像できない。

確かに、エヴァンジェリンを呪いと共に過去のしがらみから解放してやりたいと思ってあの案を出した。実力的に、彼女だけに罪を背負わせず悪の魔法使いとしてエヴァンジェリンと共に歩くのは可

能だ。でもそれは根本的解決にはならない。彼女には光に生きて欲しい。でもそうするための手段を、俺はそれしか思い付かなくて……うん、ちょっと勇氣出た。決心もついた。

俺は、エヴァンジェリンを倒す。

「お話し合いは終わったか？」

腕を組み、不敵な笑みを見せるエヴァンジェリン。既に臨戦態勢だ。

「ああ、待たせたな。俺達が勝ったら、きっちり下についてもらうからな」

右手に魔剣レヴァンティンを具現化しつつ答える。隣でニアもエリク・ライラックを具現化した。

「勝ったら、な。まあ、せいぜいあげよ！　リク・ラク・ラ・ラック・ライラック！」

エヴァンジェリンが後方に下がり始動キーを唱え始めると同時にチャチャゼロ、茶々丸の両名がこちらに突っこんでくる。

「ニア！　前衛抑えられるか！？」

「任せて！」

「おっし、頼んだぜ！！」

相棒の頼もしい返事に氣力も自然と上がるってもんだ。

「いくよ！　フェアリー・アーツ！！」

ニアがそう叫ぶと、ニアの脇に3mはあるつかという怪物が現れる。全身が真っ白な毛で覆われた二足歩行の大男、簡単に言えば雪男だろうか。間違ってもフェアリーじゃない容姿だ。雪男は腕をゆつくりと後ろに引くと、そのまま前方にアップパーを繰り出す。

——ゴオオアアツツ!!

「チツ!!」

「回避行動に移ります」

大男の繰り出したパンチの拳圧は凄まじく、捻りも加えているのか螺旋を描きながらかなりの速度で水平に飛んでいく。尚且つパンチを繰り出した男の体格からして範囲が広い。迎撃は愚策と判断したか、接近していたチャチャゼロと茶々丸も、一旦両脇に飛んで回避する。

「もらった!!」

「チツ、一人分斬り損ネタゼ」

拳圧の真後ろにぴったり張り付き、冷や汗ものの台詞と飛んできた鈍及び右腕を受け流す。そのままがら空きになった真ん中を俺は全速力で駆け抜けるが、

「闇の吹雪!!」

拳圧と同じく螺旋状に回転しつつ、前方から迫り来る黒色の吹雪。禍々しい中にも美しさを内包したそれはやがて向かい来る拳圧の先端と接触し、いとも簡単に拳圧を掻き消しながらも衰えることなく俺に襲い掛かる。だが!!

「グラン・ザッパー!!」

軽く飛び上がりながら剣を大きく振りかぶり、それを全力で振り下ろす事で前方に剣圧を飛ばす技、それがグラン・ザッパー。技の発動までが短い割に高威力の技だ。グラン・ザッパーが闇の吹雪を真っ二つに切り裂き、エヴァンジェリンへと迫る。

「ほう、やるじゃないかばーや」

迫り来る赤紫の剣圧を片手で弾き、剣圧の後ろから飛び出た俺にそう言う。ニヤリと笑うエヴァンジェリンの手からは断罪の剣が伸びており、次の瞬間には視界から消えていた。

「くっ、それ食らったら流石に死んじやうだろ」

俺の背後へと回り首を狙う断罪の剣を頭を下げた後、再度返される刃に合わせて振り向きざまにレヴァンティンを振るう。

レヴァンティン（正式名称、魔剣レヴァンティン）はその名の通り魔剣であり、魔としての価値を最高位まで高めたそれは触れたものを気化させるという断罪の剣をも受け止めた。攻撃判定が発生したことで刀身からは光弾が無数に飛び出し、エヴァンジェリンを囲んでから彼女に向け襲い掛かる。エヴァンジェリンは冷静に障壁を展開するが、

「なっ!?!」

この光弾に防御は効かない。障壁をすり抜けた光弾は、全て彼女に被弾する。ダメージ自体は大したことはないものの、被弾したことでの一瞬の硬直。俺はその隙を逃さずに技を連続で繰り出す。

「おおおおおおおつっ!!」

リフレクト・ストライフ、ハング・スラッシュ、ヴァーティカル・エアレイド。サイクロン・ブレード、クロス・エアレイド、ヘブンズ・ソード、フラッシュ・ストリーム、イセリアル・ブラスト――。

SOの必殺技を力の限り繰り出す。最後に発動したイセリアル・ブラストによって砂浜へと叩き付けられるエヴァンジェリン。盛大に砂埃が舞い視界が遮られるが、効いているかどうかなんて関係ない。確認しようものなら逆にその隙を突かれるだろう。

イセリアル・ブラストの超波動照射中に左手に具現化し起動させていた長銃を構える。銃口に発生しているサッカーボール大の青白いエネルギー球体を、砂埃の中心に向け発射した。球体は銃から発射されたにしては遅い速度で砂埃の中に消え、しかし直後にまばゆい閃光を放ちながらドーム状に拡大していく。

「御主人!!」

「マスター!!」

ニアが抑えてくれていた2人の叫びが背後から聞こえる。襲ってくる気配はないのでそのまま振り返ることなく前を見据える。

「Ancient Relics Machine」。頭文字を取りARMと呼ばれる銃の中でもより広範囲に、より高い殺傷力を誇る一品。それが今俺の手に収まっているアークノヴァである。ARM自体が魔族への対抗武器のため、不死である彼女にもかなりのダメージは見込めるはずだ。だが、俺はエヴァンジェリンを殺しに来た訳じゃない。俺の持つ力は存分に見せれた筈だし、これ以上続ければお互いにレッドゾーンに突入するだろう。彼女に続行の意思があるならばそれで投降、俺の負けだ。直径数十メートルほどに拡

がったその光が収まった後には、半球体に挟り取られた砂浜があっただけだった。

「やるじゃないかばーや。サウザンド・マスターも真つ青な火力だ」

背後から俺に抱き着くように密着し、前に回した右腕から伸びた断罪の剣を俺の首筋に向けるエヴァンジェリン。

「その火力でも、お前を動けなくすることは出来なかったけどな」

「フ、当たり前だろう。私は不死であり吸血鬼だ。どんなにダメージを負ったところでその場で再生される。まあ、確かに数回死んだがな」

「……そうかよ。」

「……降参だ。煮るなり焼くなり好きにしろ」 剣と銃を落とし、両手を上げながらそう言った。

「……はあ、降参だ。煮るなり焼くなり好きにしろ」

ハジメちゃんが武器を捨て、両手を上げながらそう宣言した。もう、負けたら意味ないのに！

その言葉を聞いたチャチャゼロちゃん、茶々丸ちゃんの両名は戦闘態勢を解き、それを見た私もフェアリーと武器を消す。2人とも一（チャチャゼロちゃんはやや不満気だが）戦闘を続ける気はないらしい。とは言っても、チャチャゼロちゃんは終始僕の呼び出したフェアリーと遊んでいたし、茶々丸ちゃんは僕が動かなければ行動

を起こさなかったので戦闘と呼べるかも怪しいものだったが。よって僕はハジメちゃんの猛攻撃を一部始終観察できたわけだが、結局ハジメちゃんは勝ちに行くことはなかった。あの程度の技で勝てるほどエヴァちゃんは弱くないし、何よりハジメちゃんは魔剣を装備した。その優しさは、時に身を滅ぼすよ？ まあ、それを防ぐために僕がいるんだけどね。

「降参？ 何をほざくかと思えば降参だと？」

ふざけるなよ小僧。貴様には私を屈服させ従わせるだけの技量と力があるはずだ。何故それを使わない？」

へえ、気付いてたんだ。流石だね。

「……何のことだ？」

本当に分かってないような声音。ハジメちゃん、始めっからその存在忘れてたんだ……。というよりもそれを使うという考えが元々なかったというべきか。

「貴様からは聖の力を感じる。それも有り得ないくらい強大な、だ。それを使えば幾らでもやりようはあっただろう？」

エヴァちゃんのいう聖の力。それは聖剣であり、魔法であり、紋章術であり、ガーディアンである。ハジメちゃんはそれだけの数の魔への対抗策を持っていた。しかしそれはつまり使えばエヴァちゃんを消してしまう可能性があるということ、そして実際それを見ただけではエヴァちゃんが引き下がるとは思えない。

「ああ、そういうことか。」

俺はお前を殺しに来たんじゃない。だからそれは使うことのない

力で、故に俺の実力には入らない。俺が今お前に剣を突き付けている、それが全てだ」

ハジメちゃんはそう言い切った。でもそれは……………。

「殺したくないから使わなかっただど…………？ この私を相手に手加減したというのか貴様は！！」

ほーら、やっぱり怒っちゃった。激昂したエヴァちゃんの魔力が吹き荒れる。この魔力を見るにエヴァちゃんも手加減してたのは明らかだけどね。

「何をそんなに怒ってるのか知らないが、俺はもともと戦うつもりなんてなかった。呪いは最初から解くつもりだったし、何より俺はお前と仲良くしたいから呼び出しに応じてここまで来たんだ。それなのに殺すつもりでやらなかったことがそんなに悪いことか？」

頑なに非を認めないハジメちゃん。なんだろう、シリアスのはずなのにすごいムズムズする。

「私と仲良くしたいだど？ 今こうしている間にも私は貴様を殺せるし、何より私は悪の魔法使いだ。仲良くするなど片腹痛いわ！」

相容れない2人。あー、すごい不毛な言い争い。見ててめんどくさいから最終手段、いつきまーす！

「えーとお、アナライズして解析。んでレストア、キュアコンディション。」

はいこれ飲んでー」

2人に近づきながら解析魔法をエヴァちゃんにかけステータスを表示させた後、状態異常回復魔法・呪文をかけ、念のために困惑気味のエヴァちゃんの顔を掴んでアンブロシアを強引に飲ませる。あまりに強引過ぎてハジメちゃんの首に向けられてた断罪の剣が危険な動きをしたけど特に問題はない。なんか怒声が聞こえるけど幻聴だ。

「んー、呪いは解除されたみたいだけど学園結界にはひっかかったままかあ。どうせならあつちも解除しちゃおっかなー」

砂浜に膝をついて咽ているエヴァちゃんを見ながら呟く。視界の端に茶々丸ちゃんに慰められてる半泣きのハジメちゃんが映った。それには特に思うこともなく次の行動に移る。

「ラフティーナ、オードリューク、ドラス・ドラムよ、私の呼びかけに応え姿を現せ！」

僕の言葉に応えるように波打ち際に3つの光の球体が現れる。光が収束すると共に露わになる3つの存在。1つは黄色のブラウス、白のフレアスカート、赤のスカーフを身に纏い、手から肩、足先から太腿までを覆うこれまた赤い防具を身につけ、腰から上下に一對ずつ光翼と尾羽のようなものを広げた金髪蒼眼の女性。その美貌は女神と呼ぶに相応しく、艶やかな前髪は真ん中で左右に分けられ、後ろ髪は後頭部で纏めている。1つは金の留め金のついた赤いマフラーと、先端に向けて螺旋模様のある角が特徴的なユニコーン。1つは人型のクワガタのようなフォルムをした3本指3本足のモノ。人型だが顔に目鼻口はついていない。額に当たる部分と顎の付け根から角がV字に、腰から下向きにギザギザの3対の羽が、肩から上にクワガタの顎のようなものがそれぞれ伸びており、肩甲骨を覆うように甲殻のようなものが迫り上がっている。顔の角と羽、両肩前

面に付いた白の装甲に描かれた3つの小さな丸が金色で、胸と腹、二の腕、足の甲以外は赤い繊維が剥き出しになっており他はほぼ紫色の装甲に覆われている。

それらはそれぞれが「愛」、「命」、「魔」を司るガーディアンと呼ばれる存在で、名を順にラフティーナ、オードリユーク、ドラス・ドラムという。

ガーディアンとは、とある世界の万物の根源であり守護獣である。強大な力を持つ彼らだが、今はその力も衰退し、ミーディウムと呼ばれる媒体を通してしかその力を発揮することはできない。

咽ていたのが収まり、そこでやっと14年も苦しめられた登校地獄があつさり解除されたことに気付いたのか、膝立ちのまま両手を見つめ呆然と固まっていたエヴァちゃんだったが、そんな中突如として現れた3つの強大な力にだらしなく口をぽかんと開けている。チャチャゼロちゃんと茶々丸も同様に固まっているようだ。状況に付いて来れてない風のハジメちゃんを放っておいてガーディアン達に話しかける。

「どうかな。アレ、解除できる？」

『出来ると分かっているからこそこの配役なのでしょう？ とはいえ、何分強大な力を秘めていますので消去は不可能です。あの力を代わりに入れておく為の依代が必要になると思いますよ』

僕の質問にそう答えるラフティーナ。うーん、依代か……。あつ、アレなんかイイかも！

「依代にちょうど良いのがあるよ。今からそれを発動させるから、タイミング合わせてね」

『分かりました』

3体が了承したのを確認して、ラフティーナの返答で思いついた案を実行に移すことにする。

「はい拘束」

「なっ!？」

ビヨンド・ルアーを鞭のように横殴りに叩き付け、ハジメちゃんとエヴァちゃんを一遍に絡め捕る。その際2人の顔を向き合わせしておくことも忘れない。

「はい仮契約ー!」

「んんっ!？」

仮契約の魔法陣を描き2人の頭を掴んで有無を言わさず仮契約。成立の証として魔法陣から強い光が溢れ出す。うん、ラフティーナ達もタイミングばっちり。

「~~~~小娘っ、一体何のつもりだ!! それにこいつ等はなんだ!!」

展開について来れず呆然とするハジメちゃんを突き飛ばし怒り心頭のエヴァちゃん。まあ無理もないか。訳も分からず仮契約だもんねー。今にも襲い掛からんと息巻くエヴァちゃんを横目に捉えつつ、仮契約が完了した瞬間に掴み取っておいた仮契約カードを眺める。

「まあ簡単に説明するとねー、登校地獄だけじゃなくて吸血鬼化も何とかしちやおうかなって思っつて。これがその結果。この子達はそれを手伝ってくれたの。」

あ、3人ともありがとねー!」

『どういたしまして。また用があれば呼んでくださいね』

手に持った仮契約カードをひらひらさせながら説明する。ガーディアン達にお礼を言っていると、ラフティーナの言葉を合図に光の中へと消えていった。光が消えるや否やエヴァちゃんに仮契約カードをひったくられた。ものすごい形相でカードを睨んでいる。

仮契約カードの中身は次の通り。

名前表記 エヴァンジェリン・A・K・マクダウエル

称号 真祖である人間

色調 スミレ色

徳性 信仰

方位 北

星辰性 冥王星

アーティファクト 吸血鬼の証明

「……………おい、この称号とアーティファクトはなんだ？」

カードを凝視しながら尋ねてくるエヴァちゃん。

「その仮契約カード自体が、エヴァちゃんの吸血鬼としての力を全て取り込んだ依代だよ。それを出すことが仮契約の目的だったわけ」「……………つまり私は、今はただの人間ということか……………？」

僕の返答に、恐る恐る見解を口にするエヴァちゃん。冷静になつてみれば分かることだ。今のエヴァちゃんからは激昂していてすら先程のような重圧は感じられないのだから。

「そうだよ。今の君は圧倒的な魔力も、膂力も、再生能力もないただの人間だよ」

「ッ！！ 『魔法の射手・連弾・氷の11矢』！！ 『氷瀑』！！
くそっ！！」

リク・ラク・ラ・ラック・ライラック！ 来たれ氷精、闇の精。
闇を従え吹けよ常夜の氷雪。『闇の吹雪』！！ ツ！？

…………… そんな……………」

エヴァちゃんから放たれた魔法は、いずれも発動こそすれ、その威力は目に見えて激減していた。はつきり言うならば、並の魔法使いでも魔法障壁を全力で展開すれば事足りるレベル。更には急激な魔力消失に体が持たずにふらついて地面に手を着き、結果魔力供給が切れたチャチャゼロちゃんも地に落ちた。今のエヴァちゃんを見て、かの闇の福音を連想する者はいないだろう。

「クツ、貴様、何が目的だ！ 貴様の主に手を出したからか！？
私が恥辱に塗れる様を見て嘲笑うためか！？」

目に涙を浮かべながらも僕を睨みつけるエヴァちゃん。やれやれ。勘違いをしているし、何より大事なことを忘れてる。

「やだなあ、そんなことするためにやったんじゃないよ。だいたいそれならハジメちゃんとキスさせる方が割に合わないし。」

まあそれは置いといて、分からない？ 力を封じ込めてるのは仮契約カードなんだよ？」

「…………… ツ、アデアット！！」

その存在の意味に思考が行き届いたエヴァちゃんはすぐさまアイティファクトを呼び出した。エヴァちゃんを光が包み込み、光が晴れた先にいたのは、紛れもなく「闇の福音」その人だった。とはい

えアーティファクトの効果により、彼女の服装は先程までの制服ではなくなっていたが。

胸元と腰の赤と紫のリボンがアクセントの青のエプロンドレス、表が黒で裏が赤いマントを身に纏い、青のソックス、茶色のローファースを履き、革手袋を嵌め、頭には青のペレー帽とゴーグルがくつついたようなものを被っている。さらに彼女の周りには新たに2つの機械が浮いていた。それぞれが赤と青の球体で、正面には大きな1つ目と、チェシヤ猫のように笑った口が描かれており、頭のてっぺんに1つと背後に2つ、それら3つを結ぶと正面から正三角形に見えるように配置されたヒレのようなものが後ろに向かって伸びている。とある世界では伝説と謳われた不死種族、ノーブルレッドの最後の生き残り、「マリアベル・アーミティッジ」のコスチュームを着、武器展開したエヴァちゃんがそこにはいた。

「……それで、これがどういうことか、説明してくれるんだろうな？」

力が戻ったことで平常心を取り戻したのか、エヴァちゃんは尊大な態度でそう聞いてくる。まあ、取り戻したというよりは忘れようとしていると言った方が正しいのかもしれない。

「そうだね、登校地獄と吸血鬼化の解除法については僕達の出生（・）に関わることだから今はまだ答えられない。でも、そのアーティファクトを出したことには答えるよ。」

簡潔に言えばエヴァちゃんの吸血鬼としての能力を着脱可能にしたかったんだけど、そのためにまず一度エヴァちゃんから「魔」の存在を切り取る必要がある。でもそのままそれを行うと術式と肉体の融合度からして死んでしまうから、「命」を安定させてから切り取ったわけだけど。そしてその切り取った力の塊を、代替りの入れ物としてそのアーティファクトに移す。工程としてはこんな感じで、

それを行ったのがさっきの3体、ガーディアンって呼ばれてる存在達。吸血鬼の能力だけじゃなく、衣装とかその機械なんかが新たに追加されたのは、作業過程でエヴァちゃん的能力とあっちの世界の不死種族の能力が干渉し合ったからだと思う」

エヴァちゃんの周りに浮いている機械、精神感應デバイス「アカ&アオ」。使用者の意のままに動く機械だ。おそらくではあるが、エヴァちゃんにはこの他にも彼女の持つ^{マリyahell}っている全ての能力が継承されているはずだ。

「……………それで、貴様はこうまでして私に何をさせたいんだ？」
「別にー。ハジメちゃんも言ってたでしょ。僕達はただ、エヴァちゃんと仲良くしたいだけだって」

僕はにこつと笑いかけながら朗らかにそう言った。

「俺、空気……………うう……………」
「元氣を出してください、一さん。……………私も同じですから」
「オレモナ」

第5話 事後報告の話だ

エヴァンジェリンと戦闘―（及びその他諸々）を行った翌日。授業を終えた俺とニアは学園長室を訪れていた。勿論、ニアに直接アポを取ってもらった上で俺は女子中エリアへと足を踏み入れた。

「それで、今日はこういった要件かの？ 何も礼を言うためだけに来たわけではあるまい？」

机の上で手を組んだ学園長はそう切り出した。学園長が言うようにこれが今日初めての会話ではなく、既に手合せの時の俺達に対する詮索を禁止してくれたことに対する礼を言った後だったりする。無論気にするなと言ってくれたが。

「はい、エヴァンジェリンのことで確認したいことがございまして、こうしてお時間をいただいた次第です」

「ほう、エヴァンジェリンかの……」

エヴァンジェリンの名を出した瞬間、学園長は目を細めた。今までの和やかな空気は霧散し、心なしか空気が重くなった気がする。

「昨日、エヴァンジェリンと接触しました。彼女が言うには自分にはある種の呪いがかけられていて、それは本来3年で解除されるはずのものだったとか。それは事実なのでしょうか？」

学園長から訝しげな視線が向けられる。少し飛ばしすぎたか？ エヴァンジェリンはそうそう自分のことを話すような性格じゃないわけだし。

「……事実じゃ」

「その呪いを解除できる可能性は？」

「現時点では可能性はないと言って良いじゃろう。あの呪いをかけたのは『英雄』ナギ・スプリングフィールドじゃ。強大な魔力と複雑な術式が相まって誰にも解けなんだ。無論儂でもな」

どこまで本当かは分からないけどな。学園全体の魔法使いが協力すればどうともなると思う。それが実行可能かは別として。

「仮にそれが解除された場合、彼女はここから追放されてしまうのでしょうか？」

意外そうに片眉を上げて見せる学園長。魔法使いの大部分が彼女を煙たがっている中、彼女を案じるとは思っていなかったからか、或いは単に話題が続くと思わなかったからか。

「ふむ、儂の名に誓って追放はせんよ。じゃが、彼女がここに留まることはないじゃろう。彼女がここにおるのは呪いがあるからであって、彼女自身がここにいたいわけではないからの。」

それに、恥ずかしながら解放された彼女を近くに置いておけるほど器の大きな者が少ないということもある」

やや自嘲気味に話す学園長。改めて状況を整理してみるが、やはりあまり芳しくないな。とはいえ、もうやってしまったからには誤魔化しは利かないのだが。

「それは、彼女が吸血鬼だからですか？」

隣から発せられる言葉に思考の海から戻される。左を向くと、ニアが毅然とした態度で学園長を見ていた。

「そうじゃの。彼女が元高額賞金首であることもまた弊害として存在しておる」

「それでは、何故ナギ・スプリングフィールドはエヴァンジェリンに『光に生きる』と言ったのですか？」

おお、なんかニアが別人のように……『ハジメちゃん、黙ってて……だから何故バレたし。』

「……エヴァンジェリンはそこまで話しおったか。まあ深く詮索はするまい。」

そうじゃな、あ奴はそこまで考えてはいなかったんじやろう。不遇の日々を送ってきた彼女に普通の生活を送って欲しかっただけじやと思う。実際、それを実行したことで起こる反発などは考えておらなんだ。かの英雄が悪の魔法使いを屈服させた、という事実故に大きな騒動は起きなかったがの」

「それはつまり、エヴァンジェリンが更生したと皆が納得すれば、彼女の呪いが解けても問題はないのでしょうか？」

「可能性としてはある、というだけじゃ。とは言え、英雄というネームバリューがそれだけ大きいのも事実じゃのう。エヴァンジェリンがここにいるということがあまり知られていないということもあるが」

俺抜きで話が進んでいく。俺、いらない子？

「それでは、僕達……僕達が英雄の後を継いでエヴァンジェリンと仲良くしても問題はないんですね？」

「そうじゃな、君達が彼女と良くしてくれるのは儂としても喜ばしいことじゃ。」

根は良い子なんじゃよ、捻くれてはおるがな」

マジで話がどんどん進んでいく。というかこれは締めに入ったというべきか。

「ありがとうございます。ハジメちゃん、アレを」
「お、おう」

軽く落ち込んでいた所に話を振られどもってしまっても、制服の内ポケットから指示された物を取り出す。手に持ったそれに魔力を込めて詠唱。

「召喚！ エヴァンジェリン・A・K・マクダウエル！！」
「なんじゃと！？」

学園長の驚いた声と共にカードが光り輝く。直後俺の右隣に魔法陣が現れ、白光が室内を満たす。光が収まるとそこには不機嫌そうに腕を組んだエヴァンジェリンの姿があった。

「エヴァと一君が仮契約を！？ しかも主が一君とは……！！」

椅子から立ち上がり驚愕を隠しきれない学園長。口を大きく開いたまま固まっていたが、すぐに冷静さを取り戻したのか椅子に座り直し、机に肘を立て両手を顔の前に組む。組んだ両手に額を当ててしばらく考え込んでいたが、一度大きく溜息を吐くと顔を上げた。

「それで、これは一体どういうことじゃ？」

やや責めるような口調の学園長。視線は初めエヴァンジェリンを向いていたが、彼女は最初からそっぽを向いており、次に俺へと向いた。

「彼女の『登校地獄』を解除しました。これについては後々必要になるからと無理を言って作ってもらいました」

仮契約カードを持ち上げながらそう言う。嘘は言っていないと思う。たぶん。

「『登校地獄』を解除じゃと……！？ 本当かの、エヴァ」
「……ああ」

学園長がエヴァに確認を求めるも、エヴァは顔を背けたまま一言だけ発し、だんまりへと戻った。

「ふむ……。今までの流れはそういうことじゃったか。
確かにこの呪いはもう解かれて然るべきものじゃが、これはあまりにも強引過ぎやしないかの？」

学園長の厳しい指摘が入る。事後承諾甚だしいし、何より個人でできる限度を超えている。そう簡単に許されるものとは思っていない。

「……はい、弁解の余地もございません。本当に申し訳ありませんでした。」

ですが、このことはエヴァンジェリンとニアの両名には一切の過失はございません。全ての責任は俺にあります。どうか2人には寛大な処置を！」

「ハジメちゃん！？」

「黙ってる」

頭を下げる俺の耳に響くニアの声にぴしゃり。頭を下げつつ右隣

からも視線を感じること気付く。

「……よい、頭を上げい。」

エヴァの人となりは知っておるつもりじゃし、2人のことも信頼しておる。じゃが、関東魔法教会の長としてこの件を見過ごすことは出来んのじゃ。それは分かるな？」

「はい」

優しい声音で話し出す学園長。しかしながら表情は優れず、思案しているのがよく分かる。

「幾つか確認させてほしい。」

まず一君、君は何故エヴァンジェリンの呪いを解こうと思ったのかね？」

「彼女の待遇に疑問を持ったからです。本来ならば既に解除されているはずの呪いに縛り付けられ、何回も学生をやり直す。もはやそれは光に生きることなどではない。」

そして何よりも、エヴァンジェリン本人の心が悪ではないと感じたからです」

隣で息を呑む音が聞こえた気がした。

「……よく分かった。」

では次にエヴァンジェリン、お主を縛り付けていた『登校地獄』はもうない。儂ですら今まで気づかなかったんだ、解除された時点でここから去ることなど容易かったろう。それでも何故、ここに留まることを選んだ？」

学園長からの問い掛け。そういえばそうだ。あの時は放置された悲しめで気付かなかったけど――（思い出したら悲しくなってきた……）、逃げられたんだよな、こいつ。特に制約を設けたわけでもな

かったはずだし。隣を見遣るとエヴァンジェリンは暫し言い淀むように下を向き、やがて若干頬の赤い顔を上げた。

「別に今すぐに出て行ってやってもいいんだ。だが、無断で出て行くものなら追手がかるし、こいつらが私と仲良くしたいなんてほざくからどう裏切ってやろうかと考えているだけだ。私がここにいる理由なんてそんな程度だ。飽きたらとっとと出て行けさ」

……何このツンデレ。可愛いんですけど。

「では、今後悪事を働こうという気持ちはあるかね？」

破壊力抜群のエヴァンジェリンにも特に反応することなく淡々と進めていく学園長。少し反省。

「もともと私はある1人を除いて自分から殺しにいったことはない。そしてこれからもそれは変わらないのならば私は一切の悪行を働かん。エヴァンジェリン・A・K・マクダウエルの名に誓おう。」

「……………チツ、こんな純粋な気持ちを裏切れるわけがないだろう……………」

エヴァンジェリンの宣誓の後、室内にまた静寂が訪れる。学園長は椅子の背もたれに体を沈め目を閉じ、エヴァンジェリンはまたそっぽを向いた。ニアは……………なんかずっと黙って下向してる。

「結論を言い渡そう。」

高橋一、ニア・レストの両名は中学卒業までエヴァンジェリン・A・K・マクダウエルの動向を監視せよ。特に問題がない限り報告

の義務はない。

エヴァンジェリン・A・K・マクダウェルは高橋一、ニア・レスト両名の中学卒業まで共に学業に励め。これは周りに対する今回のことのカモフラージュ兼準備期間であり、もし期間内に逃走した場合賞金が復活、かつ先述の両名も闇の福音の眷属として指名手配される。

これは麻帆良学園学園長、関東魔法教会会長としての決定であり、例外はないものとする。以上じゃ」

ニアを見ていた時に声をかけられたため慌てて前を向く。学園長からの処分は至って軽いものだった。エヴァンジェリンがあと半年ここにいないといけないことを除けばもはや罰ではない。本当にこれでいいのかと口を開きかけた俺を片手で制し、学園長は言葉を続ける。

「やけに軽い罰じゃと思うかの？ それは間違いじゃ。儂個人としては今エヴァが逃走したところで何の心配もせんよ。じゃが周りは世間は違う。エヴァを悪の魔法使いとして駆逐せんと躍起になつて追い回すじゃろう。そして今後もそういった考えは簡単にはなくすることはできん。それでもお主達は——エヴァも含めてじゃ——共にいることを選んだ。それは険しい道となろう。なればこそ、お主等はここで結束を高めよ。エヴァを解放してしまったことで、もはやお主らは切つても切れぬ関係となつたことを心に留めよ。

儂から話すことはもうない。出て行ってよいぞ」

「……失礼します」

学園長に返事をしたのは俺だけだった。ニアとエヴァは俺が礼をしている間に踵を返し先に出て行った。俺もそれに続く。

「一君」

「はい？」

扉に手をかけた俺の背に再度声かけられる。

「2人を決して離すでないぞ」

「……はい！」

学園長が微笑みながら頷くのを肩越しに見てから、俺は学園長室を後にした。

部屋から出ると、2人が廊下で待つてくれていた。

「ごめん、お待たせ」

そう声をかけるもエヴァはふいと顔を背けてしまい、ニアに至っては黙ったままずっとこちらを見ている。

「……ニア？」

問い掛けたらすごい目つきで睨まれた。しかし未だに喋らない。

うゝん……………ん？

「もしかして、黙ってろって言ったから？」

こくこくと頷かれた。頬をぶくーつと膨らませている。……やべえ、萌える。

「ごめん、もう喋っていいよ」

「ハジメちゃんなんか嫌い!!」

開口一番まさかの痛恨の一撃。流石にそれはグサツと刺さる。

「いやさ、あの場面でああいうのは仕方ないだろ？ 何も全員処罰されんでも良いわけだし」

苦笑を浮かべながらの弁明だが、それを聞いた瞬間にニアの眉が釣り上がった。

「黙れって言われたことよりそっちの方が問題なの！ なんで1人で解決しようとするの！？ 僕だってハジメちゃんと一緒に処罰されるつもりだったんだよ!？」

真剣な表情、真剣な声。本当にそう思ってくれてるというのが痛いほど伝わってくる。

「……ありがとな。これからはもうしないから」
「分かればいいよ、分かれば……」

予想外の素直さが逆に照れ臭くさせたのか、口を尖らせながら尻すばみにそう言うニア。うん、可愛い。

「おい」

そんなことを考えているとエヴァンジェリンから声がかかった。振り向くと一瞬目が合うも彼女はすぐに下を向いてしまった。声をかけようか迷っていると、下を向いたままエヴァンジェリンが先に口を開く。

「貴様は、貴様等は、私の呪いを解いたことを後悔しているか？」

私から噓けておいてなんだが、と小さく付け足すエヴァンジェリン。責任を感じているのだろうか。……柄じゃないな。

「何言ってんだ、最終的にこっちが勝手にやったただだろう。強引なおまけまで付けてな。昨日も言ったが俺達はもともと解くつもりだったし、どの道リスクを負うことになるのも承知の上だ。だからエヴァンジェリンが気にすることは何もないんだ。」

それに、そんなしおらしいのはキャラじゃないぜ」

「そーそー、普段通りにしてくれば良いんだよー。キャラじゃないし」

「うるさいぞ貴様等！！」

心配したのにけなされて癪に障ったであろう顔を真っ赤にして怒鳴るエヴァンジェリン。そうそう、そんな感じで良いんだって。

「チツ……」

……まあ一応は感謝しておいてやる。ありがとう」

「え？ 何て？」

「うるさいなんでもない！！」

舌打ちの後が小さくて全然聞こえなかったから聞き返したら怒鳴り返された。加えて背後から溜息が聞こえてきた。なんです。

「用は済んだ。私はもう行くぞ。茶々丸を待たせているんでな」

「お、おう」

釈然としないままの俺にエヴァがそう声をかけてくる。こちらとしても用事は済んだので引き留める必要もなく。

「あ、今日は来てくれてありがとな」

了承した後にお礼を言っ てなかったことに気付 き、歩 き出 して い た 彼女 の 背 に 声 を かけ る。

「もともと私の問題だ、貴様に礼を言われる筋合いはない」

「そうだけど、でも言っ ておきたくてさ」

「……ふん。」

……高橋一。これからは私のことをエヴァと呼べ。……じゃあな」

再び歩 き出 した 彼女 を 放 心 状 態 で 見 送 っ て し ま い、結 局 そ の 後 ろ 姿 に 声 を かけ る こ と な く 彼女 は 角 を 曲 が っ て 消 え た。

「良かったね、ハジメちゃん。エヴァちゃんにちょっとは認められ た っ て こ と だ よ」

「……ああ、そうだな。じゃあ俺達も帰ろう」

「うん！」

エヴァが歩いて行っ た 方 と は 逆 側 に、俺 達 は 足 を 進 め た の だ っ た。

「ふおっふおっふお、人の部屋の前でようやるわい。青春じゃの」

3人が去っ た 後 に は、そ ん な こ と を 呟 く 学 園 長 が い た と か。

第6話 日常が早くも変化し始めた

学園長に報告をした翌日の放課後。学校が終わって即帰宅した俺は、特に何をするでもなくリビングのソファ―に体を預けていた。学習済みの内容だから問題ないとは言え、学校が疲れることには変わりない。そういえば、隣の席の上村は若干おつむが弱いらしい。基礎問題でうんうん唸っていたから軽く助言したらすげー感謝された。んな大袈裟なと思ったが悪い気はしなかった。これからもちよくちよく勉強見てやるかな。

「ただいまー！」

「ほう、中々だな」

「お邪魔します」

どうやらあのまま寝てしまったらしい。ニアの声で目が覚めた。後の2人はエヴァと茶々丸か？

「あ、ハジメちゃん寝てたの？ おはよー」

「んーはよー」

「エヴァちゃん達はここで待ってて。飲み物持ってくるね」

リビングに入ってきたニアと挨拶を交わす。彼女は荷物をソファ―の横に置くと、そのまま奥のキッチンへと歩いていった。それを見送ってから視線を入口に向けると、部屋に入ってきた2人と目が合った。

「いらっしゃい」

「う、うむ」

「こんにちは、一さん」

俺の言葉に目を逸らすエヴァと、お辞儀を返す茶々丸。こうやって見るとほんと姉妹みたいだな。

「まあ座つてよ」

空いているソファを指差しながら言う。このリビングは20畳あり、かなりゆつたりとした空間になっている。西側に今エヴァ達が立っている入口があり、北側にキッチンへ続くドア、東側にテレビ、南側には庭へと出られるガラス戸がある。部屋の中央にテーブルとソファが3つ置いてあり、俺が座っているのが南側、ニアが荷物を置いたのが北側なのでエヴァ達は東側のソファに座ることになる、と思いきや。

「茶々丸も座りなよ」

ソファに座ったのはエヴァンジェリンのみで、茶々丸はその斜め後ろに控えたままだった。俺としては2人とも客なので楽にしてほしい。

「いえ、お気遣いなく。私はこのままで――」

「家主が座れと言っているんだ、それに従うのが筋だろう」

「……では、お言葉に甘えて」

やはりと言うか何と言うか断られてしまったが、意外にもエヴァが諭すと素直にエヴァの隣へ腰を下ろした。

「まさかこんな所に住んでいるとはな。てっきり寮住まいかと思っ

ていたんだが」

「俺もそうかと思ってたんだが、寮に入るにしても時期が中途半端だったし、俺達2人が一緒に住んでた方が警備やら何やらで都合が良いしな。運良く住んでた人が最近引っ越した空き家があるってんで学園長が手配してくれたんだよ。まあ、2人で暮らすにはちょっと広すぎて困ってるんだけどな」

「ふむ、なるほどな……」

俺の言葉を聞くや部屋を見回し始めるエヴァ。何か引っかかることもあったのか？

「お待たせー！ はい紅茶とクッキー」

そうこうしているうちにニアがキッチンから戻ってきた。テーブルに紅茶とクッキーを置き、俺の向かい側に腰を下ろす。

「そっぴゃ、何で今日2人はここに？」

訪問の理由を聞いていなかったことに気付き、飲んでいた紅茶を置きながら尋ねる。

「何、私達が帰っていたらこいつが後ろから話しかけてきたんだ。そのまま寮とは違う方向までついてくるもんだから尋ねてみたら一軒家だと聞いてな。興味が湧いたんだ」

「なるほどねえ。大したもんがなくて逆に申し訳ないが」

「私が勝手に来たんだ、お前が気にすることじゃない。それに朗報も聞けたからな」

「朗報？」

下校途中にニアと遭遇して、そのまま話の流れで見に来たらしい。

というか来るって決まった時点で念話の1つくらい寄越せっていう。ニアに視線を送ると分かっていたのか軽く舌を出してきた。よし、許す。最後の朗報って何だと思って聞き返すも機嫌よさげな表情のまま返答なし。うーん、なんかあったかなあ？

あ、そういえば俺エヴァに言いたいことがあったんだ。この世界の技術は興味あるんだよな。俺が持つてるのは他世界の技術なわけだし。

「そういえばさエヴァ、俺達って実はあんまり魔法に詳しくなくてさ。最強の魔法使いたるお前にここは一つ指導願いたいなーなんて思ってるんだが」

そう言いながらエヴァの方を見ると、何やらひどくご満悦な様子。いつの間にこのエヴァはこんなニツン成分がなくなつたのか……謎だ。

「ほう、私に教えを請いたいと。最強の魔法使いたるこの私に教えて欲しいと言っんだな？

良いだろう、教えてやる。だがタダで教えてやるわけにはいかな。茶々丸、ちょっと家に帰ってアレを持ってこい。ついでに着替えもな」

「了解しました、マスター」

絶賛上機嫌中なエヴァの言いつけに従い、茶々丸が席を立つ。俺とニアに「それでは、一旦失礼します」と声をかけてからリビングを出て行く。玄関が閉まる音がした直後にジェット噴射音が発生、徐々に遠ざかっていった。どうやら飛んで帰ったらしい。

「茶々丸が帰ってくるまで暇だな。少し中を見てきても良いか？」

「ああ、好きに見ていい」

紅茶を飲みきったエヴァが謝辞もそこに立ち上がり部屋を出て行く。なんだろう、アレ。まさか偽者って可能性は……ないか。

「なんであんなに機嫌が良いんだ、あいつは」

「分かんないの？ まあ、いいけどね」

ニアに聞いてみても、呆れた表情のまま教えてはくれなかった。
うーん？

しばらくすると外からまた噴射音が聞こえ始めた。明らかに茶々丸だろということが分かったので2人で出迎えることに。リビングを出ると奥から歩いてきたエヴァと出くわし、そのまま3人で玄関へと向かう。

「お疲れ、茶々丸」

「おかえりー！ あ、チャチャゼロちゃんもいらっしやい」

「オウ、一昨日ブリダナ餓鬼ドモ」

「ありがとうございます。マスター、これです」

「うむ、ここで開いてみる」

玄関を開けて茶々丸を迎える。茶々丸は両手でバッグを抱えており、頭にはチャチャゼロがしがみついていた。そのバッグが問題でどう見ても1m四方はありそうな。それを茶々丸は丁寧に床に下ろしファスナーに手をかける。何が入っているんだと思いきや、中に

入っていたのは頑丈そうな台座に置かれた50?ほどの透明なガラス球。その中に入れられた円柱状の白塔とそこから続く浜辺、それらを囲む海のジオラマ。エヴァ宅地下に安置されていたダイオラマ魔法球がそこにはあった。

「え?　なんでこれがここにあんの?」

思わず尋ねてしまったが、なんか事が大きくなっている臭いがプンプンするぞ。

「何、物を教えるのに時間は必要だろう?　わざわざ家に来てもらうのも忍びないと思ってな、私がここに来ることにした」

「いやどうしてそうなった」

「どの道貴様等は私を監視しなくてはいけないんだ、対象が近くにいた方が楽で良いだろう?」

……正論だ。予感は見事的中したようです。さつき着替え云々言ってる時に気付くべきだった。

「ニア、お前気付いてたんなら言えよ!」

「えー、だってエヴァちゃんに頼んだのはハジメちゃんだしー、僕にどうこうする権利はないんじゃない?」

それに2人よりも5人の方が賑やかだしー、いいんじゃない?」

ダメだ、不機嫌モードに入ってるっしやる。でも不機嫌になるくらいなら指摘の1つくらいはだな……。やめよう、ニアが悪いんじゃない。

「この家にも地下室があるようだな。せっかくだからそこに置かせてもらおうと思うが構わんな?」

「ああ、問題ない」

「うむ。行くぞ茶々丸」

「はいマスター」

「ケケケ、ソウイウコトダカラヨロシクナ、餓鬼ドモ」

地下室へ向けて歩いていくエヴァ一行。地下室なんてあったんだ。3人について行こうと歩き出すも、ニアが動かないことに気付く。

「ニア？」

「うん、ちよつと先行つてて」

俺に背を向けたままそう言うニア。その背中はいつもより小さく見えた。

「なあ、怒ってるか？」

「別に」

それが怒ってないなら何だって言うんだよ。その背中に手を伸ばしかけて、思い留まる。俺はニアに何をしてあげてるんだろうか。

ニアは、俺を助けてくれた。俺を、この世界に送ってくれた。俺に、ついてきてくれた。俺の、やりたいことをやらせてくれた。

でも俺は、ニアに何もしてやれていない。ネギま！の世界に来たのだって、可愛い女の子がいっぱいいるからっていう不純な動機だし、それは今も変わらない。でも、それだったらニアだって可愛い女の子だし、現状誰よりも俺を好いてくれるはずで。でも、俺はそれに応えることもなく、ただ受け流してただけだった。今回のこともそう。ニアからすれば、俺達2人の空間に踏み込まれたことに他ならないのだ。そこまで考えて、俺は自分のしていることの

惨さを認識した。俺はニアに何をしてやれるのだろうか。どうするべきなのだろうか。

結局答えは出せないまま、俺は衝動に身を任せた。

「ハジメちゃん!？」

「少しだけ、このままでいさせてくれ」

「……うん………」

俯くニアを後ろから抱きしめた。ニアは抵抗せずに俺を受け入れた。触れ合った部分からニアの暖かさが伝わってくる。ニアもここにいるのだと、確かにそう感じられた。ふとニアが少し動いたかと思うと、前に回した腕に手が重なった。申し訳程度に置かれたそれが、俺の心をひどく揺さぶった。

どれほどそうしていただろうか、廊下の奥から階段を上がってくる音が聞こえた。慌ててお互い体を離す。ちらりと見えたニアの横顔は、遠目からでも分かるほど赤く染まっていた。

「何してるんだ? 早く来んか」

廊下の奥から姿を現したのはエヴァだった。いつまでも降りてこない俺達にしびれを切らしたのだろうか若干苛立っているようだ。

「ごめん、すぐ行く」

鼻を鳴らして再び奥へと消えていくエヴァ。後ろを振り向くと既に普段通りのニアがこちらを向いて立っていた。

「さ、早く行かないとエヴァちゃんが怒っちゃうよ?」

「ああ……。なあニア——」

「いいんだよハジメちゃん。僕のことには気にしないで。せつかくの第二の人生なのに、やりたいことやれないんじゃないじゃ本末転倒だよ？ほら、行くよ！」

ニアに手を引かれ廊下を歩く。廊下の突き当たりに現れた地下への階段を降りながら、結論を出さずに済んだ安心と逃げに走る自分への苛立ちが心の中で戦っていた。

第7話 こうして新たな絆が生まれた（前書き）

引き続きどうしようもなく無理矢理な展開になっております。もうちよっと何とかなんらかとも思いますが、私ではこれが限界でした……。

第7話 こうして新たな絆が生まれた

エヴァの後を追ひ、階段を下りて地下室へと急ぐ。階段は下へと真つ直ぐ伸びており、階下まで十数段といったところか。階段の壁には透明なガラスに入った青白い炎が揺らめいており、前の住人が魔法使いであつたことを示していた。階段を下りるとすぐに扉があり、扉を開くとそこは8畳程の石室だつた。茶々丸が持つてきたダイオラ魔法球が部屋の中央に置いてある以外は何もない。以前は倉庫として使われていたのだろうか。

「遅い」

ダイオラ魔法球のそばに立っていたエヴァが腕を組みながらこちらを睨む。

「ごめん、待たせた」

「ふん、まあいい。早く入るぞ」

ダイオラ魔法球の手前を目で示すエヴァ。ニアと共にそこまで歩くとエヴァも一緒にそこに立ち、カチツという音と共に視界が変わつた。

所変わつてダイオラ魔法球内。無事転移を終えた俺達は以前戦闘を行った浜辺へと向かい、先に来ていた茶々丸、チャチャゼロ両名と合流した。

「それで、何を教えて欲しいんだ？」

いつの間に装着したのか、黒縁メガネを片手で持ち上げながらそう言ってくるエヴァ。何をと言われてもなあ。

「知識としては知ってるけど、実際に使ったことがないから実技、それも基礎からかな」

ネギま！の世界に来たからにはその世界の技を使ってみたいと思うのは当然だからな。

「使ったことがないだと？　そう言えば、ニアが刹那を治療したアレは何なんだ？」

「魔法とは違う体系の術で、紋章術って言うんだけど」

「仮契約で私の中に入ってきたアレか？」

「アレともまた違った体系だよ。あれも魔法の一種なんだけどね」

ひどく怪訝な表情を浮かべるエヴァ。言いたいことは分かる。

「お前達は一体何者なんだ？　お前達の使う技も魔法も、600年生きてきた私が知り及ぶものではない。……そうだな、先にそちらの事情を話せ。それが私がお前達に魔法を教える条件だ」

……いつかは聞かれると思っていたが、今聞かれるとは思わなかったな。だが、こうして対価として聞かれてしまった以上、嘘をつくわけにもいかないしつきたくない。隣に立つニアを見ると、少し複雑な表情を浮かべながら「ハジメちゃんが決めることだよ」と言ってきた。そうだな、俺が決めなきゃいけないことだ。

俺はエヴァへと視線を戻し、一度深呼吸してから口を開く。俺達が異世界の住人だということ、俺が一度死んでいること、ニアが天使であること。ここが元の世界では漫画の世界であること、俺達の持っている技術はゲームの中の技術であることを、簡潔にだが話し

た。

「……それではアレか？ 貴様等は誰にも負けない力を持って好き勝手したいからこの世界にやってきたと？」

「……………そうだ」

秘密を暴露するうちに俯いてしまったエヴァからの確認の言葉。その声音からは感情を読み取ることはできない。否定する部分はなく、俺は正直にそれを肯定する。

「私の呪いを解除したのはどういふつもりだ？」

「……それは、そうしたいと思ったからだ」

「……………私はな、煩わしい、鬱陶しい、余計なお世話だと思いつながらも、本当は嬉しかったんだ。今まで私と本気で向き合おうとしてくれた者はいなかった。私と歩んでも良いと言ってくれる者はいなかった。だからこそ、貴様等となら、私も夢を見ても良いのかとそう思ったんだ。」

だが、実際はどうだ？ 貴様等は本来この世界の存在ではなく、あまつさえこの世界では在り得ない強大な力を手にここにやってきた。わざわざ漫画の中にまで入って来て、そんな大層な力を使ってその世界の人間に干渉して、人の心を覗いておきながらあたかも自分の意志で私がして欲しいことをしたように見せかけて。貴様等は神にでもなつたつもりか！！？」

言い返すことはできない。エヴァの言うことは全て事実で、俺はやましい動機でここに来て、原作の登場人物達に囲まれることを妄想して。でもそれは裏切りでしかないのだと、仮に慕ってくれるようになったとしても、それはゲームのようなものでしかないと悟った。俺は彼女たちのことを知っているし、彼女達がどういう人物なのか、どうすれば上手く好感度を上げられるかを知っている。だが

それは漫画としての情報でしかなく、俺は彼女達のことを本当の意味で理解してはいないのだ。目の前でいきり立つエヴァを見て、そのことによりやく思い至った。

「……エヴァ、俺はこの世界に無理矢理入り込んだ代償として、一度死んだら無に帰すことになってる。お前の心を弄んだ罪は重い。どう謝罪して良いかも分からない。だから、お前が望むなら俺を殺せ。その権利がお前にはある」

「ハジメちゃん？」

「……ごめんな、ニア」

ニアの声が耳に届くも、そちらを向く勇気がない。そしてそちらを向くことのないまま、俺はニアに敵単体をマヒさせる効果を持つハッピーポーションを使用した。

せっかくついて来てくれたのに、ニアには結局何も返せなかったな。やっと、ちゃんとニアと向き合おうと思えたのに。この世界に來たいだなんて、高望みしなければ良かった。

「何を言い出すかと思えば殺せだと？……ハッ、良いだろう。一思いに切り捨ててくれるわ！」

怒気を体に纏い、エヴァが断罪の剣を振りかざしながら突進してくる。断罪、か。正しく今の俺にふさわしい。そんなことを考えている間にもエヴァは接近してきており、俺の懷に踏み込むと同時に剣を振り下ろす。そして俺は訪れる死に思いを馳せながら目を閉じた。

「どうして、殺さない？」

いつまでも訪れない痛みにも目を開けると、断罪の剣は未だ俺には届いていなかった。目の前にはエヴァの顔があり、その表情は葛藤しているかのように歪んでいる。

「どんな形であれ、貴様が私にしたことは変えようのない事実だ。それから死んで逃がれようなど、そんな甘い考えがまかり通ると思うな。」

……それにだ。そんな顔をする奴を、殺せるわけがないだろう」

そう言って剣を下ろすエヴァ。言われて初めて、俺が顔を歪めて泣いていることに気がついた。

「貴様が死んだところで、仮契約カードが死んだ私は依代を失い真祖へ逆戻り。さらには人を殺めたとしてもはや言い訳は出来ず、賞金は復活するだろう。貴様のしようとしたことはそういうことだ。貴様が犯した罪は重い。だが、それを自覚しているなら苦しみながらも生きながらそれを償う術を模索しろ。行動で示せ。」

今日は魔法の指導はナシだ。空いた時間はそこで怒り狂っている従者のご機嫌取りに充てるんだな。……無論、私だって怒っているがな。行くぞ茶々丸、チャチャゼロ」

「はいマスター」

「何シニ来タンダ俺達ハヨ」

「……言わないでください。余計虚しくなります」

「コレカラ修羅場カー。混ザリテーナー」

「良いからこっちに来い。巻き込まれたらかなわん」

エヴァ達が何か言いながら去って行ったが、今の俺にはそれを聞き取っている余裕はなかった。怒り狂っているとエヴァが言った瞬間、横から発せられている禍々しいオーラに遅まきながら気がつい

ただ。嫌な汗を大量に流しながら、ぎこちない動作で隣へ首を回す。移りゆく視界に移ったものは、マヒ効果がちょうど切れて、エンジンゼリツクケープを具現化した修羅だった。しかしその顔はくしゃくしゃで涙で汚れており、その相反する2つは俺の思考を停止させるには十分過ぎた。

「どうして、どうしてハジメちゃんはそうやって自分1人で解決しようとするの？ どうしてそうやっていつも僕のことを考えてくれないの？」

そりゃハジメちゃんだって仮契約したいって言うただけで僕について来てほしいなんて言うてないし、僕が勝手についてきただけだけど、それでもこれはあんまりだよ。死にたがって動けなくしていなくなるうとして、思わせぶりの態度を取っておきながら放置するくらいなら、初めから僕に興味なんて示さないでよ！！」

今までの溜りに溜まった鬱憤が爆発した。ニアは叫びながら俺へと突貫し、思うがままに殴りつける。あまりの衝撃に意識が飛ぶも、繰り出される次撃で戻され、そのまた次撃で飛ばされる。言葉に言い表せないくらいの痛みが全身を襲うも、抵抗は許されない。抵抗する権利は俺にはないのだ。

痛みを感じなくなってからどれほど時が経ったのか。体感時間は非常に長いものだったが、実際は十数秒のことかもしれない。連撃が止み背中から地に叩き付けられる俺と、肩で息をしながら俺を見下ろすニア。殴られ続けて狭まった視界に映るその顔は、やはり涙で濡れていた。ああ、俺は――。

「なあ、ニア……」

「……………何？」

「俺さ、誰か1人なんて選べないから、ハーレムに憧れてるんだ」
「……………うん」

「この世界にはさ、俺好みの可愛い女の子がいっぱいいるんだ」
「うん」

「だから、これからも他の子にちょっかい出しちゃうと思う」
「……うん」

「でもさ、思ってたんだよ。こっちに来てから、あたかもずっとここで暮らしていたかのように自然体でいられるのは、ニアがいつも俺と一緒にいてくれたからだって。もしニアが隣にいてくれなかったら、今までもこれから、俺すっごく空虚な気持ちになるって」

「……うん」

「こんな俺でも良ければ、これから、ニアに隣にいてほしいんだ。

ニアが、好きです」

「……………うん……………っ」

元々泣いていたのに、それ以上に涙が溢れ出す。ゆっくりと近付いてくるニア。俺の横で膝をつき、俺の顔に両手を添える。その両手から淡い光が発生したかと思うと、体の痛みが引いていった。

「ごめん、ハジメちゃん。やりすぎちゃった」

「謝らなきゃいけないのはこっちの方だ。謝りもしないで、最低の告白だろ、こんなの」

まず謝るところから始まるだろ、普通。過程をすっ飛ばして、しかも意味わかんない告白だし。1人に絞れないとか何ほざいてんだろうね。

「良いんだよ。ハジメちゃんが僕のことを想ってくれていればそれで十分だから、ね？」

未だ両手は頬に添えられたままだ。俺の顔をじっと見つめながら

微笑んでくれる。……反則だろ、こんなの。

「もう、ニアのこと蔑ろにしないから。今ここに誓うよ」

「うん、ありがとう……」。

ねえ、ハジメちゃん。初めては僕からだったから、今度はハジメちゃんからキス……して？」

照れを隠しきれない潤んだ瞳、さっきよりも熱を放つ両手、否応無く意識させられる薄く開いた唇。もはや、何も考えられない。

「ああ……………」

返事というよりはうわごとのそれを発しながら、俺は上半身を起こし、ニアとの距離を徐々に縮めていった――。

「エヴァ、いるか？」

「ああ、入れ」

エヴァちゃんにも、ちゃんと話をしてきなよ。ニアにそう言っただけで送り出された俺は、エヴァが休んでいるという部屋へとやって来た。場所は建物入口で待っていた茶々丸とチャチャゼロが教えてくれ、ニアは2人と一緒に食堂へ向かった。エヴァがいる部屋には扉がなかった。入口手前から声をかける。許可が出たので室内に入ると、キングサイズのベッドの上に上半身を起こし寝そべっているエ

ヴァの姿があった。

「その顔を見る限り、上手く仲直り出来たようだな」

「ああ。エヴァにちゃんと言っておきたくてここに来た。これから、俺がどう在るべきか」

「ほう、言ってみるが良い」

クッションに身を預けながら口角を吊り上げるエヴァ。その笑みがこの後怒りに変わるかもしれないとしても、それでも俺は言わなきゃいけない。

「俺はこの世界の知識を、原作知識を持っている。それはこの世界の人達からしたら許せるものじゃないと思う。エヴァは見逃してくれたけど、これからもそうなるとは限らないし、この知識を手に入れようとする者が現れるかもしれない。だからこんな卑劣な知識は捨てよう。そう思ったんだ」

エヴァは何も言わずに、俺から目を逸らさずに聞いてくれている。そしてその目は、ここで話が終わらないことを分かっていた。

「でもさ。ここで知識を失って、1人の人間として生きていくのも悪くないけど、どうせ持っている知識なら、それを活用しても良いんじゃないかって、そうも思ったんだ。個人情報をも分に含んだこれを使うのに抵抗はある。でも、この知識で回避できる悲劇があるのなら、俺はそれを回避したい。おこがましいし、それを達成できるかもわからないけど、そうすることがこの知識を持ってやって来た俺の贖罪なんじゃないかって」

「建前はわかった。それで、本音はどうなんだ？」

一通り話し終えた俺に突き刺さるエヴァの言葉。いや、そりゃこ

れが通るなんて思ってたけどさ……。でもこれを言うのは――

「言い訳はいらん。お前の思っていることを洗いざらい話せ。それが私に対する贖罪だと思え」

躊躇う俺に声をかけるエヴァ。強い口調の中にある優しさに後押しされ口を開く。

「……俺がこの世界に来たのは、ハーレムを作りたいと思ったからだ。知識を使って攻略しようと思ったのも確かだけど、それ以前にみんな魅力的で一目会いたいと思ったんだ。これから先原作知識なしで生きていくということは、その人達のことを忘れるということなんだと思ったら、決心がつかなかった」

本心の暴露。自分でも在り得ないと思う程の醜態を晒したにも関わらず、エヴァは口角を吊り上げながらベッドから降り、俺に近づいてくる。

「フフ、大層な文句を垂れておきながら、結局お前の本質は醜い欲望に塗れているわけだ。それにしてもハーレムか。既にあの天使を引っ掛けておきながら、さらに女を求めるとはな。その強欲さにはむしろ感心するよ。」

近づきながらそう言い、俺の目の前で立ち止まる。その距離は30?にも満たない。

「それで、その原作知識とやらに私も入っているんだろう？　だからこそ私の呪いも知っていた。お前は私も落としたいと、そう思っているのか？」

見かけ10歳の少女とは思えない妖艶な表情。誘っているかのように顎に添えられた左手に、思わず生唾を飲み込んでしまう。

「……ああ、願わくばお前を手に入れたと思うている。だが、もうそう思うのもやめるよ。そうやって得たものは所詮贗物でしかなくて、それは相手に対する礼を欠いた行為だと分かったから。だから、もうハーレムなんて幻想はむぐっ!!?」

ギャルゲをプレイするかのように彼女達と仲良くなっても、それは俺の力じゃない。そしてそうして相手の好感度を上げて、それは彼女達を1人の女性として見ていないことなんだと。そこまで考えが至っても未だ原作知識に未練がある自分に呆れながら、エヴァから視線を逸らして言葉を続けていると突然唇を塞がれた。驚愕に目を見開き視線を戻すと、悪戯が成功したと言わんばかりに目じりを下げているエヴァの顔がまさに眼前にあった。思考が状況を把握しようとする躍起になっている矢先に、口中に舌を捻じ込まれ再びパニックに陥る。口腔を犯され、舌が何度も絡み合い、猛然と込み上げてくる劣情に身を任せかけた瞬間、エヴァは俺の口内から出て行った。恐らく俺はお預けを食らったよう無様な顔をしているのだろう、俺の顔を見てエヴァは満足そうにニタリと笑った。

「初めに言うておくが、私はそういう欲望に忠実な人間は嫌いじゃない。加えてお前はあの行いに抵抗を感じているし、相手のことも考えているようだ。何と言おうと所詮はヘタレだし、褒められたものではないが、それでも私はそんなお前に好感を抱くぞ。」

例えそれが与えられた手段であったとしても、してもらって嬉しいことはやはり嬉しいし、それを実行するのはお前自身だ。状況によつては行為が関係を悪化させることにも成り得るし、何よりこうして芽生えた好感を贗物扱いされるのは屈辱だ。外では思わず激昂してしまっただが、それでもやはり自分の味方でいてくれる者の存在

は大きいんだ。それに、求められることはやはり嬉しいものなんだ。
高橋一、お前はお前が行きたい道を行け。そして、自分がしたことに責任を持て。あの天使もそれを許したんだろう？ 不本意ながら私もそれを許可してやるよ。だが、その分の対価はきっちり払ってもらうがな」

どうやら俺はどうしようもなく恵まれているらしい。だってそう
だろ？ 普通に考えたら包丁で刺されて殺されても良いレベルだ。
まあそれに近いものはついさっき体験したが、それでも結局2人は
俺を許してくれた。ならば俺はそれに最大限、いやそれ以上に応え
なきゃいけないよな。俺を見て舌舐めずりをするエヴァは、今まで
見てきた誰よりも妖艶だった。対価は何を払うんだろうと妄想に走
ってしまった俺は悪くないと思う。

こうして、俺には彼女が2人、しかも同日のうちに出来たのだっ
た。

第7話 こうして新たな絆が生まれた（後書き）

アレだ、俺がきやつきやうふふしただけなんだ。だから碌に好感度上昇イベントがないままヒロインが落ちるんだ。もう、ごめんなさい……。

第8話 予定通りレクチャーしてもらったよ

魔法球内時間で2日目の朝。修羅場を切り抜け平穏が訪れる。そんな風に思っていた時期が俺にもありました。

「……………おはようございます、お二方」

「ん~~~~、おはよ~~~~」

「うるさい、まだ寝かせろ」

もうお気付きの方もいらっしゃるかもしれませんが、俺は今起きたところです。まだベッドの上です。何故、何故同じベッドの中に兩人がいらっしゃるのでしょうか。2人は俺の腕に抱き着いて寝ており、しかも起きる気がないと来た。どうしろつつんだよ……。

「一樣、お食事のご用意が……………いえ、ごゆっくり」

「ちよつ、茶々丸————！！ 踵返さないで助けて————！！」

「！！」

結局茶々丸は戻って来てくれませんでした。薄情者が……………。

あの後しばらく頭抱えてたら（実際には腕をホールドされてるの出来ない）、いつの間にか寝てて、起きたら2人ともいなかった。安堵の中に寂しさを内包した何とも言えない気持ちで起き上がり客間に向かう。客間に入るとニアとエヴァが食事を始めており、茶々丸が給仕をしていた。チャチャゼロは酒飲んでる。

「おそーいハジメちゃん。先に食べ始めちゃったよー」

「早く顔洗って来い。お前が飯を片付けないと稽古が来らん」

怒っちゃダメだ、これっぽっちも悪いと感じてねーなこの野郎なんて思っちゃダメだ。2人の言葉に大人しく従い、顔を洗ってから朝食をいただいた。茶々丸の料理の腕は素晴らしいな。嫁に欲しい。

「なんか今すぐく破壊衝動が湧き上がってきたんだけど」

「奇遇だな、私もだ」

なんか殺気を感じるが気のせいだ。ガン見してくる4つの視線も幻覚だ。冷や汗を流しながらの朝食と相成ったのであった。

そんなこんなでやって来ましたいつもの浜辺。屋上を使わないのは修繕がめんどいからだ。ここには壊れるようなものはないからな。

「それでは早速始めるぞ。まずは基礎の基礎、『火よ灯れ』からだ。発動体は……それで良いな、では始める」

形から入るのは性格か趣味か、またもや黒縁メガネスタイルのエヴァ。今回はさらに指示棒も持っているという念の入れようだ。稽古を始めるに当たって発動体の単語が出たのでニアと2人して手を見せる。お互い左手の人指し指に指輪が嵌まっていた。エヴァもその指輪に込められた魔力に気付いたのだろう首肯し開始の号令をかける。

「火よ灯れ」

唱えてから始動キー付けてないやと気付いたけど、結果的に何の問題もなく発動した。そう、発動した。

「……貴様、覚悟は出来てるんだろうな……？」

「いやいやいやいや事故だって！ 今初めて唱えたんだよ！？」 調

整とか出来るわけないじゃん!!」

ニアは問題なくライター程度の火を指先に灯した。対して俺はやはりネギま！世界の魔法を使うことに興奮していたのだろう力み過ぎてしまったらしい、相対していたエヴァ目がけ火炎放射よろしく炎を噴射してしまった。当のエヴァは直前に障壁を展開し防御したものの、精神衛生上よろしくないのは確かで。青筋を立てて俺を睨むのは仕方ないとは思うものの、流石にそれで報復を受けるのは遠慮願いたい。

「ごめんな、悪かったつてば、な？」

「……ふん、次はないぞ。」

それにしても初めてで無詠唱発動とはな。ニアに至っては完全に制御できているし、天使は伊達じゃないということか」

「やだーそんな誉めないでよー」

両手を合わせ謝罪すると許してくれた。ほっとした。無詠唱で発動したことには俺もびっくりしたが、他の体系の発動は経験しているのだから当然か。

「まあいい。発動の感覚は掴んでいるようだから次に行くぞ。魔法の射手を全種類撃ってみろ。詠唱はその都度教える。まずは火からだ」

これも結果的には全属性発動した。ニアは天使だからか光に強い適性があり、俺は特に偏りは見られなかった。一応影と石と重力も試したがやはり難しく、実用段階に持っていくには相当の修練が必要だろう。

「お前等がバグなのはよく分かった。中級から上も詠唱だけ覚えれば使えるだろ、あとで魔法書を貸してやるから自分達で勝手にやってくれ」

エヴァンジェリン先生は指導を放棄した！ 呆れを通り越して自虐気味だぞ！

「なあエヴァ、実はまだ教えてもらいたいことがあってだな……」
「……まだ何かあるのか？ お前達に教えていると私の600年を全否定されるようで泣きたくなるんだが」

本気で落ち込んでいるエヴァにかける言葉が見つからない。自分で言うのもなんだけどバグと言うのも生温いくらいの成長速度だからなあ……。

「えーとだな、瞬動とか、浮遊術とか、転移とか……」

「気付いてはいたが、瞬動なしであの移動速度は異常だろう……。反応速度も身体強化してるんじゃないかってくらいだし……。

もうお前1回死んで来い」

「いや死んでるつつの」

「やだハジメちゃんたらおかしー！」

……。そう、この世界を生きて行くに当たって欲しいもの、それがこの3つ。瞬動に関してはより高い次元での戦闘を可能にするため、浮遊術も同様、転移は完全に厨二的思考からだ。とは言え非常に便利な能力であることには変わりないので覚えておいて損はない。転移に関してはレポートオーブつつーアイテムで代用できるんだけどな。

「はあ、まあいい。それじゃ始めるぞ。身体強化魔法もついでに教

えるがめんどくさいから適当に流すからな」
「そこはちゃんと教えてくれよ……」

まあこんな感じで、俺達はこの世界の技術を習得していったのだ。

「さて、対価をもらおうか」

「……優しくお願いします」

「断る」

「ハジメちゃん次は僕ねー」

「なんで便乗!?!」

現実世界に戻ってきた高橋一です。別荘には2週間近く入ってたから14時間か。夕方に魔法球に入ったので今は早朝だ。学校もあるしゆっくりしている時間はないな。

「エヴァは1回家に戻るのか？」

「私達が籠もっている間に茶々丸に引越しの指示を出しておいた。生活に必要なものや貴重品は全てここに持って来てある」

「ああ、茶々丸がない日があったのはそういうことか……って強引だな!?!」

「駄目だったか？」

「……………何の問題もございません」

何やら既にエヴァ家の引越しが完了していたらしい。家主に報告もなく事が終わっていたことに驚愕が隠せないが、何故かしおらしくなったエヴァを見たら全部どうでもよくなった。弱気エヴァ超

やべえ。

「ハジメちゃん？」

「ハッ、何でもないよ何でも！　じゃあ行くか」

隣から聞こえる声に我に返る。ニアさんは拗ねていらつしやるようだ。頭を一撫でからのポンポンでご機嫌取りしてから地下室から出る。うん、なんか良いな、こういうの。階段を登りながらこれからの5人暮らしに思いを馳せ、心が躍ったのだった。

第8話 予定通りレクチャーしてもらったよ（後書き）

「5人ツテ言ウ割二八俺ノ出番ガネージャーカ」

……さーせん。一応この2週間で一VSチャチャゼロとかやってるのよ？瞬動とか浮遊術とか、転移の実戦での使い方みたいな名目で原則一は回避オンリーだけでも。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6604z/>

天使と一緒にネギま！

2012年1月12日11時45分発行